

ラグビーワールドカップ 2019 を通じた
地域活性化についての調査研究
報告書

平成 29 年 3 月

総務省地域力創造グループ地域振興室

<本報告書で扱う用語・略号等について>

RWC/RWC2007 フランス大会/RWC2011 ニュージーランド大会/RWC2015 イングランド大会/RWC2019 日本大会

RWC は、Rugby World Cup (ラグビーワールドカップ) の略で、RWC2007 フランス大会は、ラグビーワールドカップ 2007 フランス大会、RWC2011 は、ラグビーワールドカップ 2011 ニュージーランド大会、RWC2015 イングランド大会は、ラグビーワールドカップ 2015 イングランド大会、RWC2019 日本大会は、ラグビーワールドカップ 2019 日本大会のこと。

NZ2011/ER2015/JR2019

NZ2011 は、New Zealand Rugby 2011 の略で、ラグビーワールドカップ 2011 組織委員会のこと。ER2015 は、England Rugby 2015 の略で、ラグビーワールドカップ 2015 組織委員会のこと。JR2019 は、Japan Rugby 2019 の略で、ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会のこと。

Rugby Union (ラグビーユニオン) /Rugby Football Union (ラグビーフットボールユニオン)

2 つに分化したラグビーフットボールの一つで、1 チーム 15 名で行われるフルコンタクトのチームスポーツ。一般に「ラグビー」と言われた場合、ラグビーユニオンフットボールを指すことが多い。

ファン・ゾーン

RWC の大会期間中にスタジアム等の周辺に設置され、スクリーンによる RWC 試合の放映やイベントの開催、飲食物や RWC 公式グッズの販売等が行われる原則入場無料のイベントスペースのこと。

WR (ワールドラグビー)

WR は、World Rugby の略で、ラグビーユニオンの国際統括団体であるワールドラグビーのこと。

RWCL (ラグビーワールドカップリミテッド)

Rugby World Cup Limited の略で、ラグビーワールドカップを運営管理する団体のこと。

RWC 開催都市 (ホストシティ)

組織委員会とホストシティアグリーメントの契約を締結した RWC の試合開催都市のこと。

目次

1	調査の背景と目的	1
(1)	はじめに	1
(2)	RWC2019 日本大会の概要（開催自治体・公認キャンプ候補地について）	2
①	RWC の概要	2
②	大会概要	3
③	RWC2019 日本大会開催会場	5
④	RWC2019 日本大会公認キャンプ候補地自治体	6
⑤	地方財政措置	8
2	レガシーとは	9
3	大規模国際スポーツ大会における取組（RWC を除く）	13
(1)	2016 年夏季リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会（以下、「2016 年リオ大会」）	13
①	大会概要	13
②	大会前に狙いとしたレガシー	13
③	大会後のレガシー	14
(2)	2012 年夏季ロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会（以下、「2012 年ロンドン大会」）	15
①	大会概要	15
②	大会前に狙いとしたレガシー	15
③	大会後のレガシー	17
(3)	2010 年冬季バンクーバーオリンピック・パラリンピック競技大会（2010 年バンクーバー大会）	18
①	大会概要	18
②	大会前に狙いとしたレガシー	18
③	大会後のレガシー	19
(4)	2002 年 FIFA ワールドカップ韓国／日本（以下、「2002 年日韓 W 杯」）	21
①	大会概要	21
②	大会前に狙いとしたレガシー	22
③	大会後のレガシー	24
(5)	1998 年長野冬季オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、「1998 年長野大会」）	27
①	大会概要	27
②	大会前に狙いとしたレガシー	27
③	大会後のレガシー	29
4	RWC における取組	31
(1)	RWC2015 イングランド大会	31
①	大会概要	31

②	大会前に狙いとしたレガシー	31
③	各都市の取組とレガシー	33
(2)	RWC2011 ニュージーランド大会	48
①	大会概要.....	48
②	大会前に狙いとしたレガシー	48
③	各都市の取組とレガシー	49
(3)	RWC2007 フランス大会	55
①	大会概要.....	55
②	大会前に狙いとしたレガシー	56
③	各都市の取組とレガシー	57
5	まとめ	60
(1)	調査結果	60
(2)	考察 ～RWC2019 で期待されるレガシーとは～	63
	参考資料	66
	・「ラグビーワールドカップ 2019 の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針」（平成28年2月24日関係府省庁申合せ）	66
	・「ラグビーワールドカップ 2019 における地域交流推進要綱の策定等について（通知）」	73
	付録（文献一覧）	78

1 調査の背景と目的

(1) はじめに

2019年にラグビーワールドカップ2019日本大会（以下「RWC2019日本大会」）が日本で開催される予定である。ラグビーワールドカップ（以下「RWC」）は、オリンピック・パラリンピック競技大会やサッカーワールドカップと並んで3大国際スポーツ大会の1つとして世界中から大きな注目を集めるものであり、ラグビーワールドカップ2015イングランド大会（以下「RWC2015イングランド大会」）においては247万人の観客数を記録するなど、試合開催会場の所在都市（以下「開催都市」）やその周辺の地域、チームキャンプ地を中心に、国内外からの多くのビジターの流入による経済効果等の波及効果が見込まれている。

RWC2019日本大会の開催は、大会開催期間はもちろん大会開催後においても、スポーツの振興のみならず、地域経済の活性化を通じた地方創生への貢献、文化プログラム等を活用した日本文化の魅力の発信、震災復興の推進や教育活動の一層の推進又は観光や国際交流の促進等の社会的・経済的に有形・無形の遺産（レガシー）の創出が期待される。

本調査研究においては、RWC2019日本大会の開催に向けて地域活性化が図られるよう、これまでの大規模な国際スポーツ大会における各国の地域活性化のための取組の調査・分析を行い、RWC2019日本大会の開催を好機とした地域活性化やレガシー醸成に向けた有効な手法について整理することを目的とする。

(2) RWC2019 日本大会の概要（開催自治体・公認キャンプ候補地について）

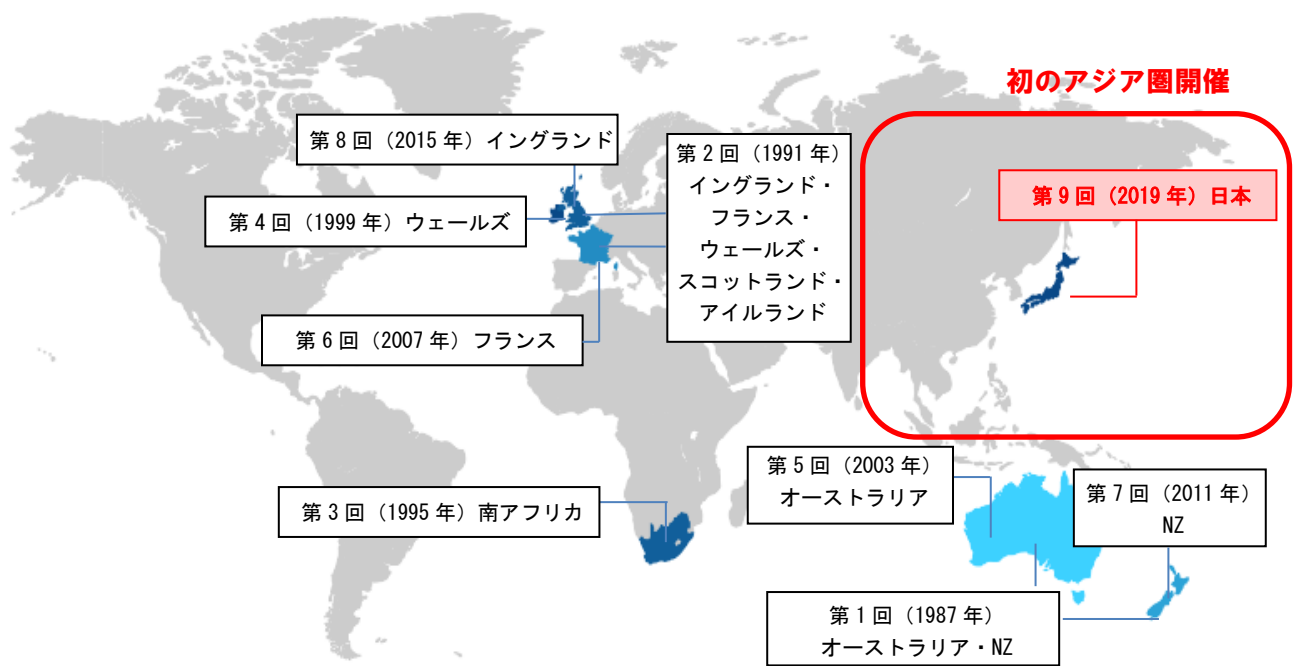
① RWC の概要

RWC は、4年に1度開催されるラグビー世界一決定戦である。第1回大会は、1987年にオーストラリア及びニュージーランドの共同開催として開催された。回を重ねるごとに規模を拡大し、前大会（2015年、第8回）は世界200カ国以上でTV放映され、全48試合の総観客動員数は史上最高の247万人、入場料収入は約2億5,000万ポンド（約465億円）にも達した。

現在、RWCはその規模でオリンピック・パラリンピック競技大会、サッカーワールドカップに次ぐ3大国際スポーツ大会となっている。RWCを主催しているのは、ラグビーの世界への普及、発展させる施策を行っている「ワールドラグビー（World Rugby、以下「WR」）」であり、RWCの運営はその専門会社として出資100%の子会社「ラグビーワールドカップリミテッド（RWCL）」を設立して実施している。

過去のRWCの開催地は以下のとおり。

大会名	開催地	観客動員数
第1回（1987年）	オーストラリア、ニュージーランド	約60万人
第2回（1991年）	イングランド、フランス、ウェールズ、スコットランド、アイルランド	約100万人
第3回（1995年）	南アフリカ共和国	約110万人
第4回（1999年）	ウェールズ（イングランド、スコットランド、フランス、アイルランドでも開催）	約160万人
第5回（2003年）	オーストラリア	約190万人
第6回（2007年）	フランス（ウェールズ、スコットランドでも開催）	約220万人
第7回（2011年）	ニュージーランド	約150万人
第8回（2015年）	イングランド（ウェールズでも開催）	約250万人



② 大会概要

RWC2019 日本大会の概要は以下のとおり。

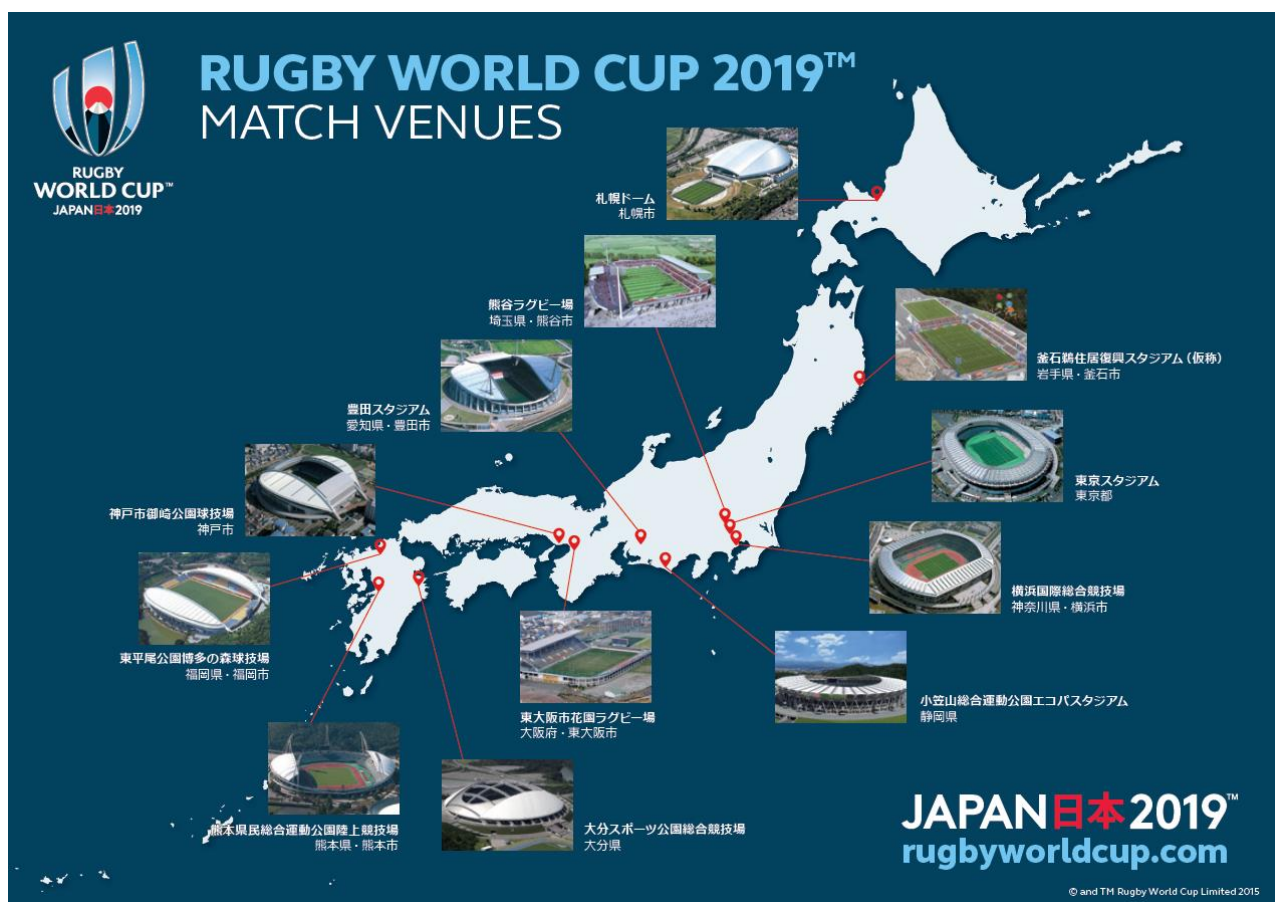
項目	内容
主催	ワールドラグビー (WR)
大会期間	2019年9月20日～11月2日 (44日間)
参加チーム	20 チーム ※2017年2月10日現在、以下の12チームは出場決定 ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、アルゼンチン、アイルランド、スコットランド、ウェールズ、フランス、ジョージア、日本、イングランド、イタリア
試合数	計 48 試合 ① 予選プール 5 チーム×4 プール (プール内総当たり戦) 40 試合 ② 決勝トーナメント 準々決勝・準決勝・3位決定戦・決勝戦 8 試合
試合開催会場	日本全国 12 会場 (会場については③に記載)

公認チームキャンプ地	90 自治体 76 件の応募（会場については④に記載）
大会の特徴	<p>① アジアで初の RWC</p> <p>② ラグビー伝統国以外で初の RWC</p> <p>③ ラグビー（7人制）がオリンピック種目に採用されてから最初の大会</p>
ビジョン	<p>“絆 協創 そして前へ”</p> <p>“Connect Create Go Forward”</p> <p>Connecting people in Japan, Asia, and around the world to create a groundbreaking and inclusive celebration of Rugby and Community.</p> <p>We will go forward as one, to build a better future for all.</p> <p>（日本語訳）</p> <p>日本と世界の人々を強い絆で結び、誰も経験したことのない、ラグビーと仲間たちの祭典を協創しよう。</p> <p>すべての人の輝く未来へ、進もう心ひとつに。</p>
ミッション	<p>Creating an exceptional experience for teams and fans with a strong NIPPON</p> <p>Celebrating the world’ s best in Japan and the best of Japan to the World</p> <p>Connecting the whole of Japan through rugby, values and friendship</p> <p>Going forward to convert a new generation of rugby participants in Asia</p> <p>（日本語訳）</p> <p>「強いニッポン」で世界の人々をおもてなししよう</p> <p>すべての人が楽しめる大会にしよう</p> <p>ラグビーの精神を世の中に伝えよう</p> <p>アジアにおけるグローバルスポーツの発展に貢献しよう</p>

③ RWC2019 日本大会開催会場

RWC2019 日本大会の試合開催会場は、以下の 12 会場¹が予定されている。

開催都市	試合開催会場	試合開催会場の特徴
札幌市	札幌ドーム	既存施設／41,410 人収容／球技専用（屋内型）
岩手県・釜石市	釜石鶴住居復興スタジアム（仮称）	新規施設／16,187 人収容／球技専用
埼玉県・熊谷市	熊谷ラグビー場	既存施設／24,000 人収容／ラグビー場
東京都	東京スタジアム	既存施設／49,970 人収容／多目的
神奈川県・横浜市	横浜国際総合競技場	既存施設／72,327 人収容／陸上競技場
静岡県	小笠山総合運動公園エコパスタジアム	既存施設／50,889 人収容／陸上競技場
愛知県・豊田市	豊田スタジアム	既存施設／45,000 人収容／球技専用
大阪府・東大阪市	東大阪市花園ラグビー場	既存施設／30,000 人収容／ラグビー場
神戸市	神戸市御崎公園球技場	既存施設／30,312 人収容／球技専用
福岡県・福岡市	東平尾公園博多の森球技場	既存施設／22,563 人収容／球技専用
熊本県・熊本市	熊本県民総合運動公園陸上競技場	既存施設／32,000 人収容／陸上競技場
大分県	大分スポーツ公園総合競技場	既存施設／40,000 人収容／陸上競技場



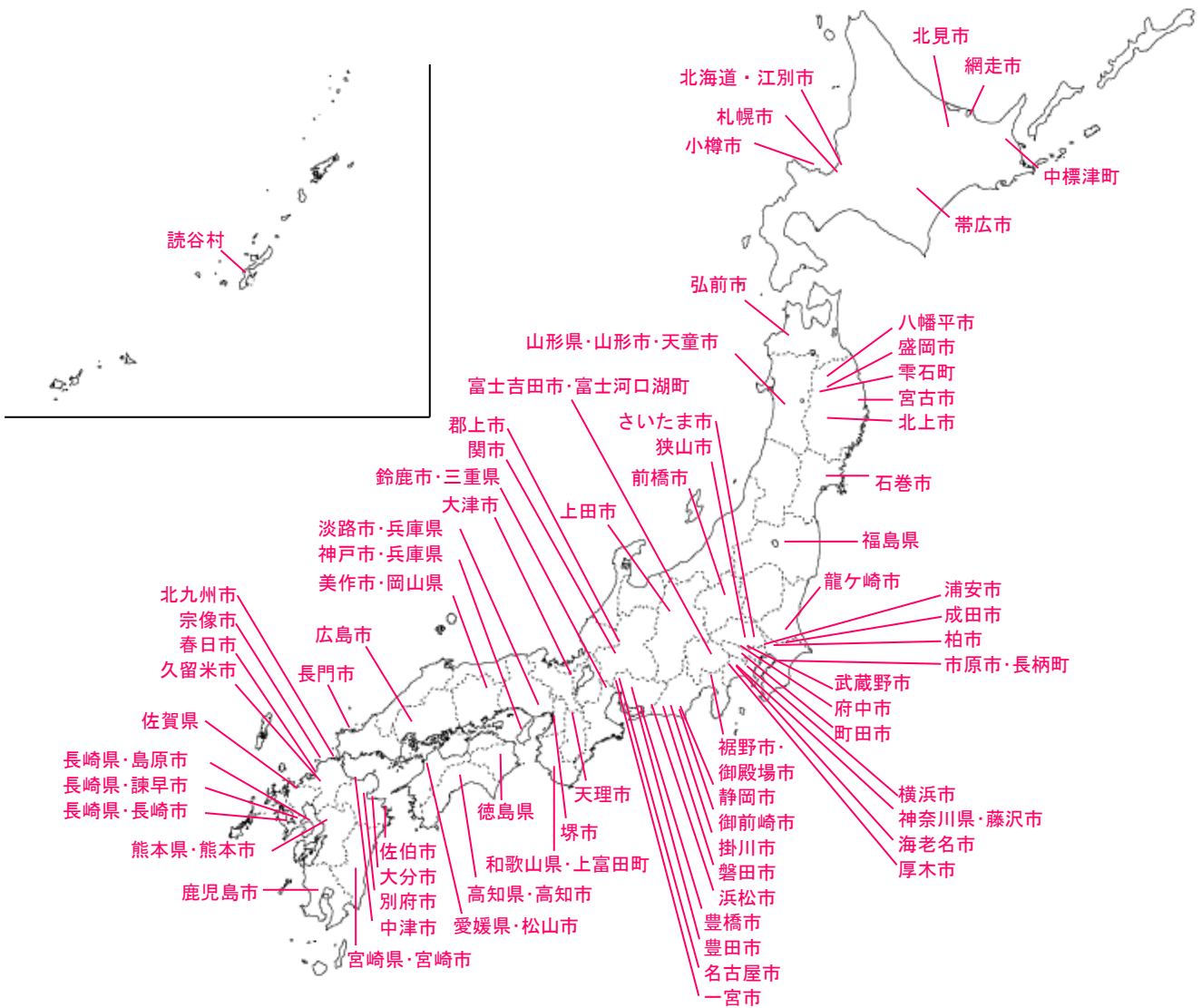
¹ 公益財団法人ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会 提供資料

④ RWC2019 日本大会公認キャンプ候補地自治体

RWC2019 日本大会の公認チームキャンプ地として、90 自治体から 76 件の応募²があった。今後、JR2019 による審査を経て、2017 年夏以降に公認チームキャンプ候補地が決定される予定となっている。

都道府県	応募自治体
北海道	北海道・江別市、札幌市、小樽市、帯広市、北見市、網走市、中標津町
青森県	弘前市
岩手県	盛岡市、宮古市、北上市、八幡平市、雫石町
宮城県	石巻市
山形県	山形県・山形市・天童市
福島県	福島県
茨城県	龍ケ崎市
群馬県	前橋市
埼玉県	さいたま市、狭山市
千葉県	成田市、柏市、市原市・長柄町、浦安市
東京都	武蔵野市、府中市、町田市
神奈川県	神奈川県・藤沢市、横浜市、厚木市、海老名市
山梨県	富士吉田市・富士河口湖町
長野県	上田市
岐阜県	関市、郡上市
静岡県	静岡市、浜松市、磐田市、掛川市、裾野市・御殿場市、御前崎市
愛知県	名古屋市、豊橋市、一宮市、豊田市
三重県	鈴鹿市・三重県
滋賀県	大津市
大阪府	堺市
兵庫県	神戸市・兵庫県、淡路市・兵庫県
奈良県	天理市
和歌山県	和歌山県・上富田町
岡山県	美作市・岡山県
広島県	広島市
山口県	長門市
徳島県	徳島県（2 件＝同一自治体による複数応募）
愛媛県	愛媛県・松山市
高知県	高知県・高知市
福岡県	北九州市、久留米市、春日市、宗像市
佐賀県	佐賀県
長崎県	長崎県・長崎市、長崎県・島原市、長崎県・諫早市
熊本県	熊本県・熊本市
大分県	大分市、別府市、中津市、佐伯市
宮崎県	宮崎県・宮崎市（2 件＝同一自治体による複数応募）
鹿児島県	鹿児島市
沖縄県	読谷村

² 公益財団法人ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会 HP <http://www.rugbyworldcup.com/news/215578?lang=ja>



⑤ 地方財政措置

RWC2019 日本大会の開催自治体及び公認チームキャンプ候補地自治体については、平成 29 年度以降の大会の推進のための経費について、新たに以下の措置の対象となる。

○ 地域交流等の取組に対する特別交付税措置

(対象団体)

開催自治体又は公認キャンプ候補地自治体

(地域交流については、RWC2019 日本大会における地域交流推進要綱(以下「要綱」という。)に基づき、スポーツ庁が支援の対象と認めている地方公共団体。)

(対象事業)

①地域交流

要綱に基づく交流計画に記載した取組に要する経費(行政の内部管理経費は対象外)。

- － 歓迎イベントの実施、選手団による現地体験、競技イベントの開催、ボランティアの研修
要する経費 等

②公認キャンプ実施

公認キャンプ実施のための基準を満たすトレーニング施設の確保や必要な環境整備に要する経費。

- － トレーニング機器のレンタル、トレーニング施設としての民間施設利用、セキュリティ確保に要する経費(フェンス設置費など) 等

○ 開催自治体又は公認キャンプ候補地自治体が行う施設改修に係る地方債措置

(対象団体)

開催自治体又は公認キャンプ候補地自治体

(いずれも公共施設等総合管理計画を策定している地方公共団体。)

(対象事業)

開催自治体においては、既存のスポーツ施設を「会場建設等に関する運営計画」が求める必須条件に適合させるために必要不可欠な改修事業。

公認キャンプ候補地自治体においては、既存のスポーツ施設を公認チームキャンプ地ガイドラインの基準(必須条件に限る。)に適合させるために必要不可欠な改修事業。(施設の新設は対象外。その他、地域活性化事業債の取扱いに準じる。)

(地方債措置) ・ 地域活性化事業債(充当率 90%、交付税措置率 30%)

2 レガシーとは

英語の legacy は「遺産」「先人の遺物」と訳されるが、これが、スポーツ大会の文脈で初めて使われたのは、1956年のオリンピック・メルボルン大会招致だと考えられている。その際、オーストラリア政府は「レガシーとして、オーストラリアのアマチュアスポーツの崇高な理念を展示するセンターを設立する」と発表した。その後、2003年7月にはオリンピック憲章に以下の一文が加わった。

オリンピック競技大会のよい遺産を、開催国と開催都市に残すことを推進すること。

(第一章「オリンピック・ムーブメントとその活動」の第二項「IOCの使命と役割」の十四号)

以降、オリンピックの開催都市として立候補する場合は、大会開催に伴ってどのようなレガシーを創出するのか、具体的なプランをまとめて提出することとなった。近年では、「レガシー」は国際オリンピック委員会（以下「IOC」）が最も力を入れているテーマの一つとなっている。

1964年の東京オリンピックにおけるレガシーとしては、新幹線や首都高速道路など、ハード面での遺産が主に語られるように、レガシーといった場合、一般的には、大会の開催を円滑に行うための都市のインフラや施設の整備といった「有形のレガシー」がイメージされやすい。しかし、近年では、2002年の日韓共催サッカーワールドカップにおいて、両国の若者による交流などの「無形のレガシー」が残ったと言われるように（第3章において詳細記述）、レガシーの概念は多様化している。

2013年にIOCがオリンピックのレガシーについて取りまとめたブックレット「OLYMPIC LEGACY」³では、オリンピック・レガシーを以下のように分類している。

³ 「OLYMPIC LEGACY」(IOC) https://stillmed.olympic.org/Documents/Olympism_in_action/Legacy/2013_Booklet_Legacy.pdf

分類	内容	取組み例
スポーツ レガシー	スポーツ施設	<ul style="list-style-type: none"> ・施設の長期活用【ストックホルム五輪】 ・施設の用途多様化【バンクーバー五輪、ロンドン五輪】
	スポーツ振興	<ul style="list-style-type: none"> ・スポーツ振興・スポーツ習慣の向上【バルセロナ五輪】 ・貧困地域へのスポーツ機会提供【ロス五輪】 ・小学生のスポーツ参加に向けた新カリキュラム【ロンドン五輪】
社会 レガシー	文化（世界に向けた文化の発信）	<ul style="list-style-type: none"> ・先住民に関する文化イベント【シドニー五輪】
	教育（優秀さ、友情、尊敬）	<ul style="list-style-type: none"> ・教育省と五輪委員会の共同教育プログラム【北京五輪】
	多様性と協調	<ul style="list-style-type: none"> ・新たなボランティア文化の創出【ロンドン五輪】 ・貧困地域の企業からの調達【バンクーバー五輪】 ・就労プログラムによる社会的包摂【ロンドン五輪】
環境 レガシー	都市の再活性化	<ul style="list-style-type: none"> ・劣化した土地の緑地化【シドニー五輪】 ・植樹【アトランタ五輪】 ・サステナビリティマネジメント（環境配慮）【ロンドン五輪】
	新しいエネルギー資源	<ul style="list-style-type: none"> ・大気汚染改善【北京五輪】 ・選手村へのソーラーパネル設置【シドニー五輪】 ・下水処理施設の熱利用【バンクーバー五輪】 ・低炭素型冷暖房システム【ロンドン五輪】
都市 レガシー	都市開発	<ul style="list-style-type: none"> ・老朽エリアの景観改善（ファサード、歩道整備等）【アテネ五輪】 ・貧困地域の再開発【ロンドン五輪】
	交通インフラ	<ul style="list-style-type: none"> ・ライトレール整備【バンクーバー五輪】 ・空港、道路、地下鉄整備【北京五輪】
経済 レガシー	経済振興	<ul style="list-style-type: none"> ・GDP 成長【シドニー五輪等】 ・中小企業振興【ロンドン五輪】 ・地域雇用（僻地）創出【リレハンメル五輪】
	観光振興	<ul style="list-style-type: none"> ・観光客増加【トリノ五輪】 ・地域（国）ブランド向上【バンクーバー五輪】

RWC においても、2011 年のニュージーランド大会から「レガシープログラム」の導入が本格的に始まり、国際ラグビー評議会（2014 年 11 月 19 日より WR に名称変更。）と開催国協会が交わす契約 Host Union Agreement (HUA)において、レガシープログラムの提供も義務とされている。

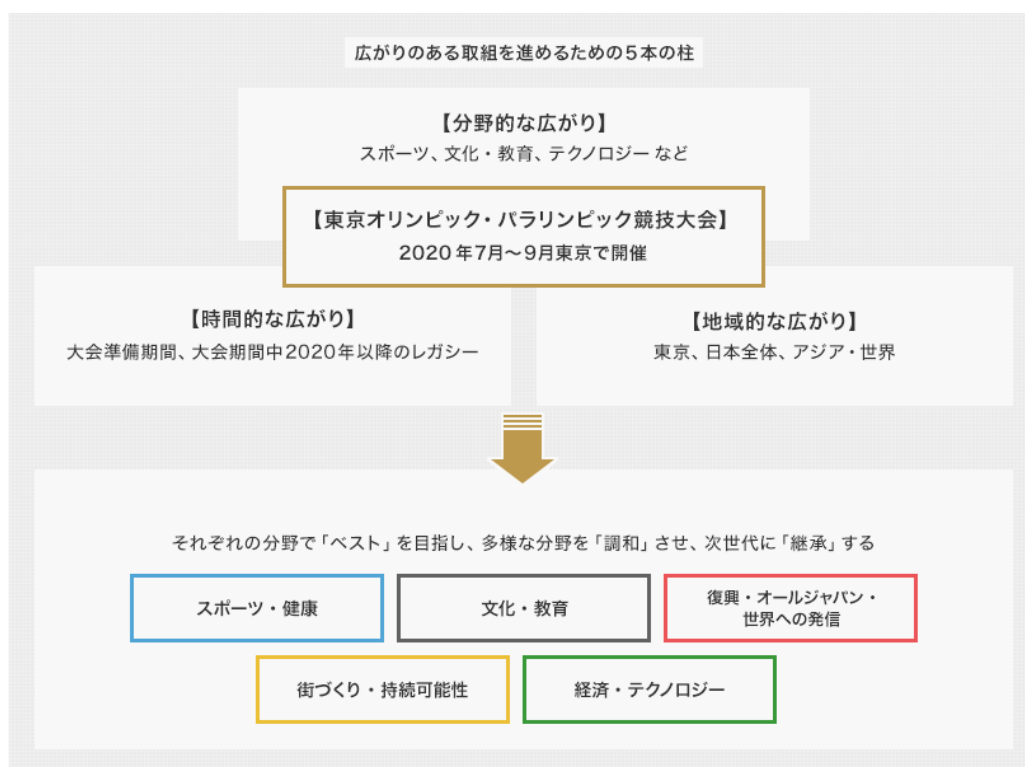
日本政府としては「ラグビーワールドカップ 2019 の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針」（平成 28 年 2 月 24 日、関係府省庁申合せ）において、「ラグビーワールドカップ 2019 の開催は、その有形・無形の遺産（レガシー）を創出することを通じて、大会開催期間はもちろん大会開催後においても、スポーツの振興のみならず、地域経済の活性化を通じた地方創生への貢献、文化プログラム等を活用した日本文化の魅力の発信、震災復興の推進や教育活動の一層の推進又は観光や国際交流の促進等の社会的・経済的発展に貢献できると考えられる。また、ラグビーワールドカップは、翌年の 2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の意義を更に高めるものであり、国内におけるオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの一層の促進にも寄与するとともに、国外における我が国に対する注目を集めることを可能にし、そのことがさらなる外国人等のインバウンドの増加をもたらし、社会・経済の活性化に寄与することが期待できるものである。」と位置付け、関連施策の立案と実行に取り組む基本的な考え方の第 1 番目に「次世代に誇れる遺産（レガシー）の創出」として「ラグビーワールドカップ 2019 を開催期間において確実に成功させるのはもとより、大会の開催後においても有用であり次世代に誇れる有形・無形の遺産（レガシー）を、日本ラグビーフットボール協会等が中心となって国内及びアジアをはじめとする海外に創出する。」と掲げた。

とりわけ、施策項目には「東日本大震災の被災地の復興を後押しするとともに、復興を成し遂げつつある被災地の姿を世界に向けて発信するため、被災地と連携した取組を推進する。また、大会に関連する様々な事業やイベント等に多様な主体が参画し、日本全体でビジネス機会の拡大を含め地域活性化につながるよう、大会開催の効果を全国に普及させるため、以下の取組を推進する。」としており、取り組むべき事項として「東日本大震災被災地との連携、大会と連携した地域交流・地域活性化、大会に関連する様々な事業やイベント等への多様な主体の参画と連携、文化プログラム等を活用した日本文化の魅力の発信、キャンプの誘致等を通じた大会参加国との人的・経済的・文化的な相互交流等」を掲げ、震災復興及び地方活性化のための対策を進めることとしている。

本調査報告書においては、有形・無形のものを含めて、「大会をきっかけにして、社会、地域、人々の心に残るもの」をレガシーと捉えて整理することとする。

＜参考＞東京オリンピック・パラリンピックのレガシープランについて

東京 2020 大会組織委員会は、多様なステークホルダーが連携して、レガシーを残すためのアクションを推進していくために、「スポーツ・健康」、「街づくり・持続可能性」、「文化・教育」、「経済・テクノロジー」、「復興・オールジャパン・世界への発信」の 5 本の柱ごとに、各ステークホルダーが一丸となって、計画当初の段階から包括的にアクションを進めていくこととしている⁴。



東京 2020 大会組織委員会は、このような「アクション」と、その成果として東京 2020 大会をきっかけにその後の東京・日本そして世界に「レガシー」として何を残すかをまとめた「アクション&レガシープラン」を策定して毎年改訂を重ね、最終的には、東京 2020 大会終了時点で、2016 年から 2020 年までの取組と、2020 年以降に残ることが想定されるレガシーをまとめた「アクション&レガシーレポート 2020」を策定することとしている。

⁴ 「2020 年東京オリンピック・パラリンピック競技大会におけるレガシープラン」東京 2020 大会組織委員会 HP

3 大規模国際スポーツ大会における取組（RWCを除く）

本章では、大規模国際スポーツ大会における当初計画していたレガシーと大会後に残ったレガシーについて、各国の報告書等から整理を行った。

(1) 2016年夏季リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック競技大会（以下、「2016年リオ大会」）

① 大会概要

2016年リオ大会の概要は以下のとおり。

項目	内容
開催時期	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリンピック：平成28年8月5日～8月21日（17日間） ・ パラリンピック：平成28年9月7日～9月18日（12日間）
競技数	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリンピック：28競技・306種目 ・ パラリンピック：22競技・528種目
参加国・地域／選手数	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリンピック：205の国と地域から約10,500人 ・ パラリンピック：160以上の国と地域から約4,350人

② 大会前に狙いとしたレガシー

2016年リオ大会では、ハード面のレガシーとして公共交通機関の整備が掲げられ、コパカバーナ地区～バッハ地区間を結ぶ道路の複数車線化や、地下鉄4号線、VLT、BRT新設等が行われ、大会後はリオ市民の交通手段として有効活用することが計画された。また、バッハ地区のオリンピック・パークを中心に、スポーツ施設の整備が行われ、大会開催後も有効活用されることが計画された。当初想定されていたレガシーについては、以下のとおり整理されている⁵。

目標	取組
都市の変革	<ul style="list-style-type: none"> ・ 産業や交通の排出ガスの抑制 ・ 公共交通の整備 ・ セキュリティの向上 ・ 都市の森林保全 ・ 湾岸エリアの宿泊施設としての整備、住居の建築、スポーツ・レクリエーション設備の整備 等

⁵ 「2016年リオ大会立候補ファイル」（リオ市）

社会的インクルージョン	<ul style="list-style-type: none"> 選手村のマンションとしての提供（24,000 部屋以上） 48,000 人の成人や若者に対するボランティア参加を通じたキャリア形成支援 雇用増加等
子供や若者への教育	<ul style="list-style-type: none"> 教育プログラムの推進 公立学校におけるスポーツ施設の整備
効果の測定	<ul style="list-style-type: none"> 経済効果の測定
スポーツ振興	<ul style="list-style-type: none"> アスリートの奨学金制度 オリンピックトレーニングセンター制度 政府のスポーツ予算の増加 スポーツ施設の整備 等

③ 大会後のレガシー

笹川スポーツ財団が発表している「2016年リオデジャネイロ大会のレガシープラン」によると、2016年リオ大会におけるハード面のレガシーとして、公共交通機関とスポーツ関連施設の大きく2つに大別されている⁶。

目標	取組
公共交通機関	<p>繁華街やビーチがあるイパネマ地区と競技会場や選手村等があるバッハ地区をつなぐ地下鉄の延長工事、市の中心部を走る VLT（ライトレール）、競技会場があるデオドロ地区とバッハ地区を結ぶ BRT（バス高速輸送システム）が整備され、大会後も市民の足として直接的な恩恵があると整理されている。</p>
スポーツ関連施設	<p>大会開催後も引き続きアスリートの練習拠点や大会の開催施設として活用されるものに加え、大会開催後に別の目的に活用される施設がある。</p> <p>バッハ地区のカリオカアリーナ3は、大会開催後は改修され、スポーツ専門学校となり、柔道、卓球、バレーボール、バスケットボール等10種目のトップ選手を目指す青少年が学ぶ場となる予定である。また、バッハ地区のフューチャーアリーナは、大会開催後に解体され、4つの公立学校になる予定である。</p>

ソフト面のレガシーについては、大会終了後から間もないことから、今後その成果が分析・検証されていくこととなる。

⁶ 「2016年リオデジャネイロ大会のレガシー・プラン」（笹川スポーツ財団）

(2) 2012年夏季ロンドンオリンピック・パラリンピック競技大会（以下、「2012年ロンドン大会」）

① 大会概要

2012年ロンドン大会の概要は以下のとおり。

項目	内容
開催時期	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリンピック：2012年7月24日～8月12日（20日間） ・ パラリンピック：2012年8月29日～9月9日（9日間）
競技数	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリンピック：26競技、302種目 ・ パラリンピック：20競技、503種目
参加国・地域数／選手数	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリンピック：204か国・地域、約10,500人 ・ パラリンピック：164か国・地域、約4,300人

② 大会前に狙いとしたレガシー

英国政府文化・メディア・スポーツ省は、「(1) 英国を世界有数のスポーツ大国にする、(2) ロンドン東部地区の中心地を変革する、(3) 青少年が地域のボランティア・文化・スポーツ活動に参加するよう鼓舞する、(4) オリンピック・パークを持続可能な暮らしの青写真とする、(5) 英国が、住む人や観光客、事業者にとって、創造的かつ社会的に寛容で、快適な国であることを世界に示す。」の5つの公約を明記し、レガシー項目として立候補ファイルには以下を掲げた⁷。

目標	取組
スポーツ	<ul style="list-style-type: none"> ・ スポーツ施設の整備（オリンピック・スタジアム、アクアティクス・センター、ベロパーク、ホッケーセンター、インドアスポーツセンター）
コミュニティ	<ul style="list-style-type: none"> ・ ロンドンの貧困・条件不利地域の再開発 ・ オリンピック・パークの整備により、健康的な生活、教育、技術と訓練、職業機会、文化、住居、社会の統合や環境面において重要な改善が得られる。 ・ オリンピック・パラリンピックは、多様性のあるロンドンにおける重要な事項であるアクセシビリティ⁸とインクルージョン（共生）を促進する。特に、障害者のための施設の整備が促進される。 ・ 大会は文化活動を強化することとなり、東ロンドン地区に価値のある遺産を残し、創造的な産業のための新しい機会や施設を提供することとなる。

⁷ 「2012年ロンドンオリンピック・レガシーの概要」（(一財)自治体国際化協会 ロンドン事務所）

⁸ 「アクセシビリティガイド Accessibility Guide」（原文：IPC、日本語訳：(公財)日本障がい者スポーツ協会）

環境	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリンピック・パークは近隣住民が一緒に使える素晴らしい環境であり、グリーン空間、空気や水の改善等が見込める施設である。
経済	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリンピック・パークの整備に7,000人のフルタイム労働者が雇用され、そのエリアの開発に12,000種類もの仕事を創出する。 ・ 多くの雇用の創出と労働者の教育、技術や知識の改善が見込める。

とりわけ、パラリンピック開催に際してのレガシーとしては、英国政府文化・メディア・スポーツ省は以下のとおり取組を計画している⁹。

分類	内容
態度や見方に影響を与える	<ul style="list-style-type: none"> ・ メディアが広範囲にわたり報道すること（パラリンピック放送等） ・ アクセスしやすく、万人を受け入れる（ボランティアの機会等） ・ イギリスを2012年ロンドン大会と結びつける（インスパイアプログラム等） ・ すべての子供たちを関与させること（Get Set 教育プログラム等）
スポーツや身体的な活動への参加を増やす	<ul style="list-style-type: none"> ・ 障害を持つ人々がより積極的になるよう、奨励する。 ・ 障害を持つ大人がスポーツをする機会を増やす。 ・ 障害を持つ子供たちと若者たちのスポーツの機会を増やす。 ・ アクセスしやすい設備の供給を増やす。
障害を持つ人々のビジネス、輸送、雇用機会の改善	<ul style="list-style-type: none"> ・ ビジネス・チャンス（国家的な制度、受容性およびアクセス性の高い企業、障害がある人々が保有する企業をサポートする） ・ 仕事やスキルへのアクセス（雇用機会の増加、スキル開発支援等） ・ アクセスしやすい観光（スタッフ教育、アクセスしやすいホテル等） ・ 公共交通機関の改善（アクセスしやすい輸送機関、インフラストラクチャー等）

⁹ 「London 2012: a legacy for disabled people」 (HM Government)

③ 大会後のレガシー

大会のレガシーとしては、以下のとおり、「(1) スポーツや健康的な生活、(2) 東ロンドン地区の再生、(3) 経済成長、(4) コミュニティの育成、(5) パラリンピックを活用した障害の理解促進や環境改善」の5つのレガシーに関する成果が整理されており、とりわけ貧困層の多い東ロンドン地区の都市開発によって、貧困問題の課題解決につながったことが「最大のレガシー」と言われている¹⁰。

分類	内容
スポーツや健康的な生活	<ul style="list-style-type: none"> ・ スポーツ選手への助成増加 ・ 週1回運動する人の増加(140万人以上) ・ 学校スポーツへの1.5億ポンド/年の助成(2013年以降) ・ スポーツ国際交流(20カ国1500万人の参加)
東ロンドン地区の再生	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリンピック・パーク・施設の整備 ・ 交通インフラの整備(約65億ポンドの投資) ・ 1万1,000戸の住宅整備、1万人の新規雇用創出
経済成長	<ul style="list-style-type: none"> ・ 280~410億ポンドの経済効果、62~90万人の雇用創出(2020年まで) ・ 失業者への雇用創出(7万) ・ 2014年ワールドカップ、2016年リオ五輪に向けた新規契約の獲得(1.2億ポンド) ・ 海外からの観光客増(2012年に前年比1%)、観光消費増(2012年に前年比4%)
コミュニティの育成	<ul style="list-style-type: none"> ・ 10万人の新規ボランティア(2013年) ・ 文化プログラムへの参加(4,300万人) ・ 環境配慮(オリンピック・パークの土壌洗浄、ISO20121等)
パラリンピックを活用した障害の理解促進や環境改善	<ul style="list-style-type: none"> ・ 障がい者のスポーツ参加向上 ・ パラリンピック支援助成の増加 ・ 交通、社会インフラにおけるアクセス性の向上

10

「Inspired by 2012:The legacy from the London 2012 Olympic and Paralympic Games」(HM Government)

(3) 2010年冬季バンクーバーオリンピック・パラリンピック競技大会（2010年バンクーバー大会）

① 大会概要

2010年バンクーバー大会の概要は以下のとおり。

項目	内容
開催時期	・オリンピック：2010年2月12日～2月28日（17日間） ・パラリンピック：2010年3月12日～3月21日（10日間）
競技数	・オリンピック：7競技86種目 ・パラリンピック：3競技5種目
参加国・地域数	・オリンピック：82か国・地域 ・パラリンピック：44か国・地域

② 大会前に狙いとしたレガシー

2010年バンクーバー大会の招致活動時の招致ファイル¹¹によると、レガシーについて体系的に整理された項目はないものの、2010年バンクーバー大会のレガシーに相当する項目として、以下の内容が記載されている。本大会は、計画段階で初めてサステナビリティ（持続可能性）を取り入れた大会となった。

目標	取組
スポーツ施設の整備	・ スポーツ施設が国際競技連盟（IF）の基準を満たすだけでなく、カナダのアスリートの成長につながること。
パラリンピック選手村	・ 将来のWカップ開催時の選手受入に活用できる部屋（216室、うち半数は完全なアクセシビリティ対応）
ウィスラー市におけるアクセシビリティ	・ ウィスラー市が世界で最もアクセシビリティに配慮したウインターリゾート地となり、社会的及び経済的なサステナビリティ（持続可能性）に貢献すること。

¹¹ 「VANCOUVER 2010 Bid Report」（vancouver 2010）

③ 大会後のレガシー

大会のレガシーは以下のとおり整理されており¹²、とりわけカナダ観光局は、大会の効果をまとめた映像資料「2010 オリンピック・レガシー (CTC 2010 Olympic Legacy)」を制作して、カナダ各地の観光地としての魅力を発信したため、カナダ各地の認知度が高まり、旅行先として選ばれるきっかけづくりにつながった。また、バンクーバーでは、2011年から2012年にかけて、過去に比較して多くのコンベンションが開催されるなど、大会の開催によりビジネスの機会促進の効果もあった¹³。

分類	内容
スポーツレガシー	・ スポーツ施設の用途多様化
社会レガシー	・ 貧困地域の企業からの調達による格差の是正
環境レガシー	・ 下水処理施設の熱利用等による環境エネルギーの普及 ・ スポーツイベント開催時のサステナビリティガイドの作成等によるサステナビリティ（持続可能性）への配慮の機運の上昇
都市レガシー	・ ライトレール等の交通インフラの整備
経済レガシー	・ 大会後、多くのコンベンションが開催される等のビジネス機会の促進、地域（国）ブランドの向上

¹² 「オリンピック・レガシーについて」（株式会社三菱総合研究所）

¹³ 「オリンピックがもたらす開催都市への波及効果～バンクーバー冬季オリンピック編～」(カナダ観光局メディアセンター)

2010年バンクーバーオリンピック・パラリンピックは、計画段階でサステナビリティ（持続可能性）を取り入れた初めての大会である。カナダオリンピック組織委員会と International Academy of Sports Science and Technology (AISTS) が中心となり、スポーツイベントに特化したサステナビリティ（持続可能性）ガイドとして「Sustainable Sport and Event Toolkit (SSET)」が作成された¹⁴。

SSETは、スポーツイベント開催時に考慮すべき「チェックリスト」であり、イベント運営の各段階において考慮すべきポイントや、その解決例を示すものである。実用的な内容となっており、スポーツイベントの開催計画を立てる際などに参考になるものとなっている。



1. 持続可能な公約と戦略の作成

持続可能性や持続可能なスポーツイベントに関する組織的な公約を作成してください。また、排出の削減、二酸化炭素の排出抑制、廃棄物の抑制・ゼロ化、インクルーシブでアクセシブル、そして倫理的なスポーツやイベントを目指す努力をしてください。

実施事項	実施方法	委任	確認	参照
目標	活動事項	有識者	活動状況	参照
持続可能なスポーツイベントを開催することについて公約を作成する <small>BS 8901 (6); BS 8900 (4.1); ISO 14001 (4.2)</small>	持続可能なスポーツイベントを運営する目的について言及する声明文を作成し、それを内外に示す 達成指標：公約文章を作成したかどうか		議論した <input type="checkbox"/> 文書化した <input type="checkbox"/> 実行した <input type="checkbox"/> 適用できない <input type="checkbox"/>	例
持続可能性に関する重要な事項と関係者を把握する <small>BS 8901 (7); BS 8900 (4.2)</small>	あなたの重要なパートナー（例えば、国際競技団体、組織委員会、国内競技団体、スポンサー、地域のパートナー、自治体）の支援を受け、それらの重要なパートナーにも公約に入ってもらおう。 達成指標：パートナーの支援に関する署名や文書		議論した <input type="checkbox"/> 文書化した <input type="checkbox"/> 実行した <input type="checkbox"/> 適用できない <input type="checkbox"/>	関係者分析チャート
対象範囲を定義する <small>BS 8901 (6); ISO 14001 (4.1, 4.3)</small>	達成指標：範囲が定義されたかどうか		議論した <input type="checkbox"/> 文書化した <input type="checkbox"/> 実行した <input type="checkbox"/> 適用できない <input type="checkbox"/>	範囲決定ツリー

※上記のチェックリストについては、原文（英語）を日本語に翻訳した

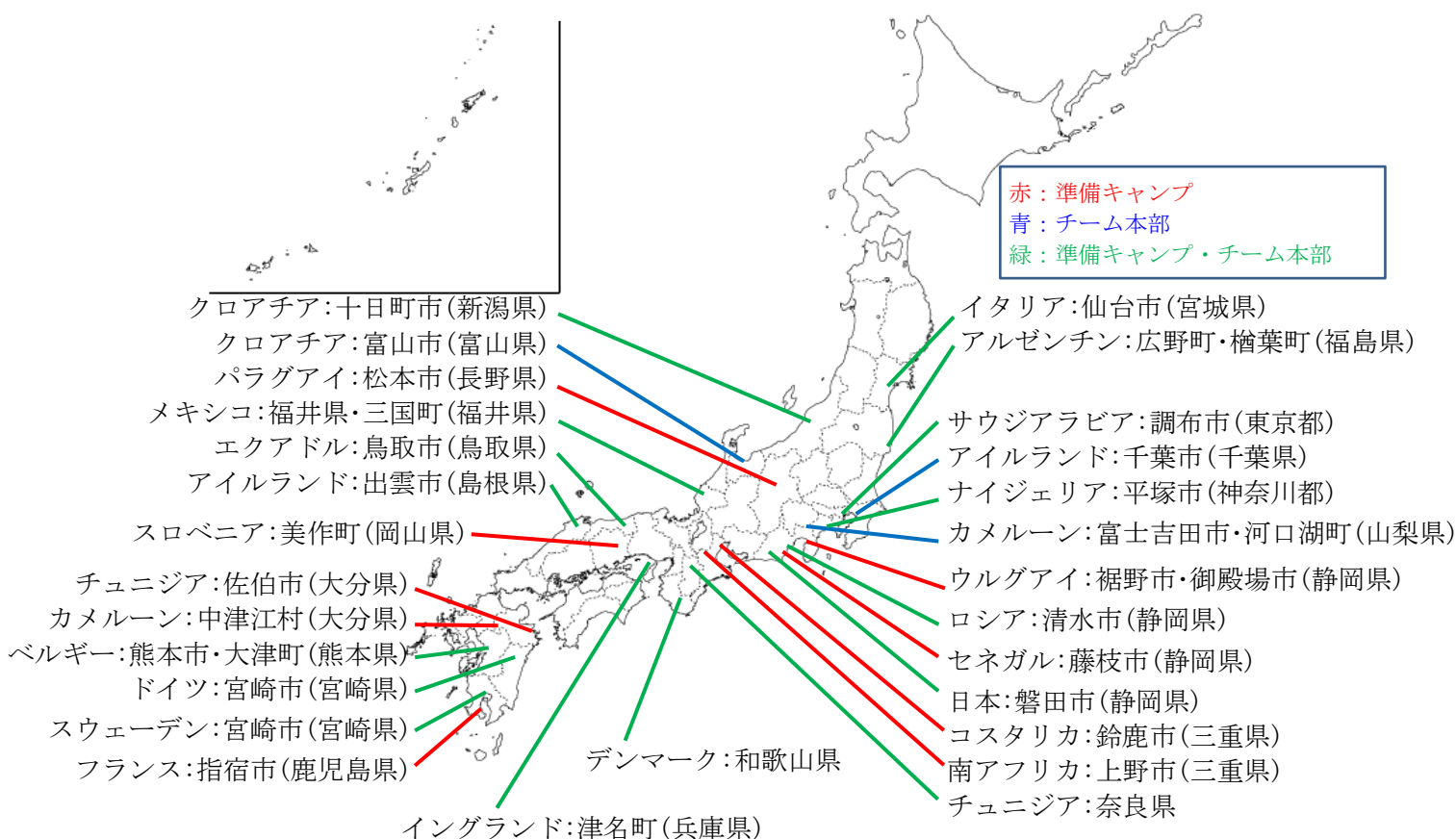
(4) 2002年FIFAワールドカップ韓国／日本（以下、「2002年日韓W杯」）

① 大会概要

2002年日韓W杯の概要は以下のとおり。

項目	内容
開催時期	・2002年5月31日～6月30日（31日間）
参加国・地域数／選手数	・32チーム
開催会場	・20会場（日本と韓国で各10会場）

1991年1月に（財）2002年ワールドカップサッカー大会日本組織委員会（JAWOC）がトレーニングキャンプの候補地の募集を開始。最終的に全国84か所の自治体から応募があり、招致活動の結果、参加32チーム中、24チームが28の自治体の所有する施設において準備キャンプ及びチーム本部を設置することを決定した¹⁵。



¹⁵ 「特集1：2002FIFAワールドカップにおける国際協力」（（一財）自治体国際化協会）

② 大会前に狙いとしたレガシー

大会招致時点で想定されたレガシーの参考として、「2002 FIFA ワールドカップ大会報告書」には、以下のとおり、日本招致の基本的な考え方が記載されている¹⁶。

<2002年ワールドカップ日本招致の基本的考え方>

- 国際サッカー連盟（FIFA）の理念やワールドカップの意義を踏まえ、日本がホスト国としてアジアをはじめとする世界サッカー界の交流と発展に寄与するとともに、広く世界の人々との相互理解や信頼関係を深め、世界の平和に貢献する。
- 世界最大のスポーツイベントを契機に、国際的に開かれた社会経済システムの整備拡充、生活者優先社会の構築を実現し、その成果を世界に普及するよう努める。
- 21世紀を展望し、国内開催候補地15自治体の地域特性を生かしたスタジアムづくりや夢のある都市づくりを推進しつつ、国際意識、ホスピタリティ、ボランティア精神を醸成し、豊かな社会を創造する。そして開催候補地それぞれが持つ独自の歴史、文化から成る魅力・活力あふれる“日本社会”、人間味あふれる“日本人”を世界に向けてアピールする。

また、同報告書において、開催自治体選定に当たっての基本理念が以下のように記載されている。

<開催自治体選定に当たっての基本理念>

- ワールドカップを開催する意義・効果
 - ・日本におけるスポーツの振興
 - ・国・開催自治体のイメージアップ
 - ・国際化の推進、スポーツ施設の整備を通じた地域の活性化
 - ・地域の人々の地元意識の高揚等
- ワールドカップを開催することによって、日本におけるスポーツ振興はもとより、国・開催自治体のイメージアップや国際化の推進のみならず、我々の基本理念であるスポーツ施設の整備を通じた地域の活性化・地域の人々の地元意識の高揚等、大きな社会的・文化的な波及効果が期待される。
- ワールドカップ開催を通じて地域特性を生かした個性豊かな地域づくりを進め、「スポーツ文化」を育み、地域から世界に向けた情報発信・世界の人々との交流を実現し、それらをもって多極分散型国土形成に資するべきであるとする。
- ワールドカップの開催自治体選定に当たっては、できるだけ広く、また、地域バランスを配慮し、日本全国でワールドカップを開催することによって、これら効果を日本全国へ広めることを基本理念とする。

¹⁶ 「2002 FIFA ワールドカップ大会報告書」（2002年ワールドカップサッカー大会日本組織委員会）

これらより、当初想定されたレガシーを以下のとおり整理した。

目標	取組
スポーツ振興	<ul style="list-style-type: none"> ワールドカップ開催によるスポーツ振興
国や開催自治体のイメージアップ	<ul style="list-style-type: none"> 開催自治体それぞれが持つ独自の歴史、文化から成る魅力・活力あふれる“日本社会”、人間味あふれる“日本人”を世界に向けてアピールする
国際化の推進	<ul style="list-style-type: none"> 世界最大のスポーツイベントを契機に、国際的に開かれた社会経済システムの整備拡充 国際意識、ホスピタリティ、ボランティア精神の醸成
スポーツ施設の整備	<ul style="list-style-type: none"> スタジアムをはじめとするスポーツ施設の整備を通じた地域活性化や地域の人々の地元意識の高揚
地域の活性化	<ul style="list-style-type: none"> 大会の開催の効果を全国に広め、それによる地域特性を活かした個性豊かな地域づくりを進める。開催自治体選定に際し、できるだけ広く、また地域バランスを配慮することで、分散型国土形成に資する

③ 大会後のレガシー

「W杯の事後検証～自治体による検証はなされたのか～」¹⁷によると、各開催自治体はワールドカップ開催の効果等として特記すべきこととして、以下のように回答している。

開催自治体	効果
札幌市	<ul style="list-style-type: none"> 会場となった「札幌ドーム」は、8,300トンのサッカーステージを空気圧で10分の1の重さとし、スタジアムの中に移動する芝転換システムを備えることで、天然芝のサッカーと人工芝による野球、また、コンサートや様々なイベントを開催できる世界で初めてのスタジアムとして関係者各方面の注目を浴びている。 エンブレムを使用した開催地独自の「コンポジットロゴ」の製作が初めて認められた。
宮城県	<ul style="list-style-type: none"> 開催地であったことに加え、イタリア代表チームが仙台市でキャンプをしたことから、“MIYAGI”を世界に発信することができた。 1,600名を超えるボランティアの方々の活動や社会参加の高まり、様々な国際交流のほかに、集団災害緊急医療体制や、危機管理連絡体制等の構築を通し、関係機関の結びつきが強固になった。
茨城県	<ul style="list-style-type: none"> スタジアム周辺のファン・ゾーンが盛り上がるなど、地域の一体感が深まった。 交通インフラの整備が進み、休日なら東京八重洲から鹿島まで1時間20分程度で着けるほど、東京方面（東関東自動車道 湖来インターチェンジ）からのアクセスがよくなった。
埼玉県	<ul style="list-style-type: none"> キルトリーダーズ埼玉（キルト製のミニサッカーボールをつくって外国からの観戦客などに配る活動）、埼玉サッカーサポーターズ（ワールドカップ観戦客に折り鶴を配ることをはじめ、様々な活動を展開）、定住外国人ネットワーク（在日外国人が海外からの観戦客への案内・通訳などを実施）など、県内各地で様々な自主的活動がボランティア的に展開され、県のホスピタリティが向上した。 開催自治体として、世界的に埼玉県の知名度が上昇した。特に、シャトルバスとして低公害バスを用いるなどにより、「環境優先」の県政の基本理念を国内外にPRできた。 県内でスポーツをする人が増加した（「週に3日以上」、「週に1～2日程度」スポーツをする人が、1年間で14ポイント増加した）。

¹⁷ 「W杯の事後検証～自治体による検証はなされたのか～」(RIETI)

横浜市	<ul style="list-style-type: none"> ・ ボランティア活動が活発に行われ、募集を通じて多様な人材の発掘ができた。 ・ 横浜の都市知名度が向上した。 ・ ワールドカップ後に開催された「知的障害者サッカー大会」決勝戦には2万5千人もの来場者があり、障害者スポーツへの振興に結びつくなど、スポーツの振興に結びついた。
新潟県	<ul style="list-style-type: none"> ・ スポーツが新設された。 ・ 市内各所で市民が海外観戦客と肌で触れ合い交流を深めたこと、案内ボランティアとして外国人と直接話をしたり、言葉が通じなくても意思が通じ合えたりしたことなど、今までなかった大規模の市民レベルでの国際交流が行われた。 ・ シャトルバス運行のノウハウを得た。
静岡県	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教育の現場では学校ごとに参加国の勉強（一校一国運動）をし、国際理解の一助になった。 ・ 地域住民と地元自治体とが協力しながら、静岡から浜松までイベントを開催し、ここに外国人／県外の人が多く参加、国際交流が図られた。
大阪市	<ul style="list-style-type: none"> ・ 地域のホスピタリティが向上。 ・ ボランティア活動の高まり。 ・ 大阪の都市知名度が向上した。
神戸市	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「神戸エンジェル」によるアフガニスタン難民キャンプの子どもたちへサッカーボールを贈る運動や、多数のボランティア参加など、市民の自治参加意識が醸成された。 ・ スタジアム周辺の4小学校では、神戸で試合を行う4か国からそれぞれが応援する国の神戸在住外国人や大使館の方々との交流会をはじめ、その他の多くの小中学校でも国を決めて、その国のことを学びかつ応援する活動ができるなど、国際交流が進んだ。
大分県	<ul style="list-style-type: none"> ・ 多数のボランティア参加など、住民の自治参加意識が醸成された。 ・ 中津江村の事例など、国際交流が進んだ。

以下の大分県中津江村で開催されたカメルーンチームのキャンプ¹⁸は、多くのメディアの注目を集めた好例である。

<大分県中津江村のキャンプ地を通じた PR の成功事例>

キャンプ地の一つであった大分県中津江村では、約 1,300 人の人口で過疎化が進む中、カメルーンの前準備キャンプを迎え、チームの到着が遅れたにも関わらず、村を上げて歓迎したことから、メディアの注目を大きく集め、村の知名度が一気に高まった。また、大会開催後も、「大分カメルーン親善協会」や「中津江笑顔の会」などがカメルーンとの間にでき、交流が進んだ。



【カメルーンチーム到着の様子】



【キャンプを見学する人々の様子】

18 「カメルーンがやってきた中津江村長奮戦記」及び「ワールドカップ・キャンプ誘致とまちづくり—大分県中津江村の取り組み—」

(5) 1998年長野冬季オリンピック・パラリンピック競技大会(以下、「1998年長野大会」)

① 大会概要

1998年長野大会の概要は以下のとおり。

項目	内容
開催時期	・オリンピック：1998年2月7日～2月22日 ・パラリンピック：1998年3月5日～3月14日
競技数	・オリンピック：7競技68種目 ・パラリンピック：5競技34種目
参加国・地域数／選手数	・オリンピック：72か国・地域 ・パラリンピック：32か国・地域

② 大会前に狙いとしたレガシー

1998年長野大会の開催報告書¹⁹によると、同大会では、以下の開催計画によって準備がされていた。

目標	取組
ピースアピール活動	<ul style="list-style-type: none"> ・ 守られた「聖なる停戦決議」 ・ 対人地雷の廃絶の訴え ・ 聖火リレーでアピール ・ チャリティーウォーク
自然にやさしく	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新たな開発は最小限に ・ 動物たちの営みに心配り ・ 地形、生態系を守る工法 ・ リサイクルの工夫
子供たちの参加	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国際ユースキャンプの実施 ・ 長野市「一校一国運動」(長野市内76の小・中学校、特殊教育諸学校が1校ごとに応援、交流する国・地域を決め、文化交流などに取り組んだ。) ・ 文科省、長野県教育委員会の取組 <ul style="list-style-type: none"> ➤ 「スノーレツククラブ」 ➤ 「子どもカレンダー」 ➤ 「子どもフォーラム」 ➤ 「小学生作文コンクール」 ➤ 農業高校生の栽培した冬に咲く花

¹⁹ 「第18回オリンピック冬季競技大会公式報告書」(信濃毎日新聞社)

ありがとうボランティア	<ul style="list-style-type: none"> ・ 笑顔で親切に ・ Team' 98 の活動（ボランティアの自主的な連絡組織「Team' 98」はニュースの発行、インターネットのホームページなどを活用、きずなを深めた。）
歓迎の心をつたえよう	<ul style="list-style-type: none"> ・ 26 の住民組織 ・ 競技開催市町村の活動 ・ 選手・役員に手作りの品々 ・ 長野の文化紹介 ・ 民間団体による活動
ハイテクノロジー	<ul style="list-style-type: none"> ・ カーナビ都市 ・ 目の虹彩で安全管理 ・ 初の試み VOD（ビデオ・オン・デマンド） ・ エリアに高度情報通信網 ・ 的確に気象予測

③ 大会後のレガシー

1998年長野大会では、参加国の歴史や文化を小中学生たちが学ぶ「一校一国運動」が展開された。下表のとおり、長野市内の75校が75か国と交流を行った²⁰。

学校名	交流相手国	学校名	交流相手国
城山小	モンゴル	川田小	スウェーデン王国
後町小	イギリス、日本	保科小	スウェーデン王国、朝鮮民主主義人民共和国
鍋屋田小	イタリア共和国、トリニダード・トバゴ共和国	昭和小	ギリシャ共和国
加茂小	アイスランド共和国	川中島小	オランダ王国
山王小	キプロス共和国	青木島小	ドイツ連邦共和国
芦田小	カナダ、エストニア共和国	下氷鮑小	チェコ共和国
古牧小	ニュージーランド、ボリビア共和国	三本柳小	ボスニア・ヘルツェゴビナ
緑ヶ丘小	エストニア共和国、ケニア共和国	真島小	オーストリア共和国
三輪小	リヒテンシュタイン公国	七二会小	グルジア共和国
吉田小	ベラルーシ共和国	信田小	チリ共和国
裾花小	ジャマイカ	更府小	スペイン
城東小	イギリス、インド	柳町中	アルゼンチン共和国、日本
湯谷小	ハンガリー共和国	櫻ヶ岡中	ニュージーランド
南部小	メキシコ合衆国、ベルギー王国	東部中	アメリカ合衆国、プエルトリコ
大豆島小	カザフスタン共和国、ベネズエラ共和国	西部中	トルコ共和国
朝陽小	イタリア共和国、イスラエル	三陽中	セネガル共和国、ハンガリー共和国、コスタリカ共和国、イギリス
柳原小	アルメニア共和国、アイルランド	東北中	ブラジル連邦共和国、パミューダ
長沼小	ウクライナ	北部中	スロバキア共和国
古里小	大韓民国	芋井中	アイスランド共和国
若槻小	アメリカ合衆国、南アフリカ共和国	小田切中	ラトヴィア共和国
徳間小	ルーマニア	裾花中	ロシア連邦
浅川小	フィンランド共和国	犀陵中	スロベニア共和国
芋井小	リトアニア共和国	篠ノ井東中	アルジェリア民主人民共和国、ポルトガル共和国
安茂里小	フランス共和国	篠ノ井西中	アメリカ合衆国、オーストラリア
松ヶ丘小	USバージンアイランズ	松代中	中華人民共和国
通明小	スイス連邦、大韓民国	若穂中	デンマーク王国、アンドラ公国
篠ノ井東小	ノルウェー王国	川中島中	ドイル連邦共和国
篠ノ井西小	デンマーク王国、アンドラ公国	更北中	キルギス共和国
共和小	ノルウェー王国	広徳中	ブルガリア共和国
信里小	スイス連邦	七二会中	オーストラリア
塩崎小	ノルウェー王国	信更中	モナコ公国
松代小	カナダ	信大付属小	モルドバ共和国
清野小	ポーランド共和国	信大付属中	ルクセンブルグ大公国
西条小	ブラジル連邦共和国	長野盲	イタリア共和国
豊栄小	チャイニーズ・タイペイ、イスラエル	長野ろう	アメリカ合衆国
東条小	クロアチア共和国	長野養護	ブラジル連邦共和国、パハナ
寺尾小	中華人民共和国	若槻養護	スロバキア共和国、タジキスタン共和国
綿内小	ウズベキスタン共和国、イラン・イスラム共和国		

²⁰ 「「一校一国運動」の今日的展開」（関東学園大学・共同研究費 研究成果報告書）

1998年長野大会で行われた「一校一国運動」をきっかけとし、観光の仕事を目指す長野市出身の若者や、教育支援活動に参加した後、教師になった若者など、「一校一国運動」が多くの人材を育てたとの報告がある²¹。

長野県では、1998年長野大会の開催実績を活かし、2018年に開催される平昌冬季オリンピック・パラリンピック競技大会（2018年平昌大会）の開催地等との交流が進み、2016年12月には、開催地の一つである江原道と友好交流協約を締結し、交流協力を強化している。締結後は長野市内で2018年平昌大会のPRイベントが開催され、江原道立芸術団による韓国伝統舞踊や伝統音楽の公演が行われる等、文化交流も行われている²²。

²¹ 「チャレンジTokyo 長野五輪が子どもたちに残したもの」(NHK ONLINE)

²² 「2016年12月14日聯合ニュース」(chosen online)

4 RWCにおける取組

(1) RWC2015 イングランド大会

本章では、RWCにおける当初計画していたレガシーと大会後に残ったレガシーについて、現地調査等を行い、整理を行った。

① 大会概要

RWC2015 イングランド大会は、史上最多となる 247 万 4,584 人の大観衆を集め、各都市に公式に設けられたファン・ゾーン（バーや遊具施設を備え、大型ビジョンで試合を観戦できる場所）には 100 万人以上が訪れるなど、観客動員、収益ともに史上最大となった。

項目	内容
大会期間	2015 年 9 月 18 日～10 月 31 日（44 日間）
参加チーム	20 チーム オーストラリア、イングランド、ウェールズ、フィジー、ウルグアイ、南アフリカ共和国、サモア、スコットランド、日本、アメリカ合衆国、ニュージーランド、アルゼンチン、トンガ、ジョージア、ナミビア、フランス、アイルランド、イタリア、カナダ、ルーマニア
試合数	48 試合
開催都市 (Host City)	12 都市（ラグビー市はファン・ゾーン開催のみ）
公認チームキャンプ地 (Team Base)	41 箇所（候補地数 61 箇所）

② 大会前に狙いとしたレガシー^{23 24}

目標	取組
競技人口の増加	<ul style="list-style-type: none"> イングランドラグビー協会 (RFU) は RWC2015 イングランド大会を最大限に活用し、競技人口の増加とラグビー環境の改善に大規模な投資を行う。具体的には、タッチラグビーの施設を増やし、競技人口の増加を図る。また、“Return to Rugby（ラグビーをもう一度はじめよう）”プログラムの取組を行い、ラグビー経験者に競技復帰を促す。

²³ 「The economic impact of Rugby World Cup 2015」(EY) [http://www.ey.com/Publication/vwLUAssets/EY-rugby-world-cup-final-report/\\$FILE/EY-rugby-world-cup-final-report.pdf](http://www.ey.com/Publication/vwLUAssets/EY-rugby-world-cup-final-report/$FILE/EY-rugby-world-cup-final-report.pdf)

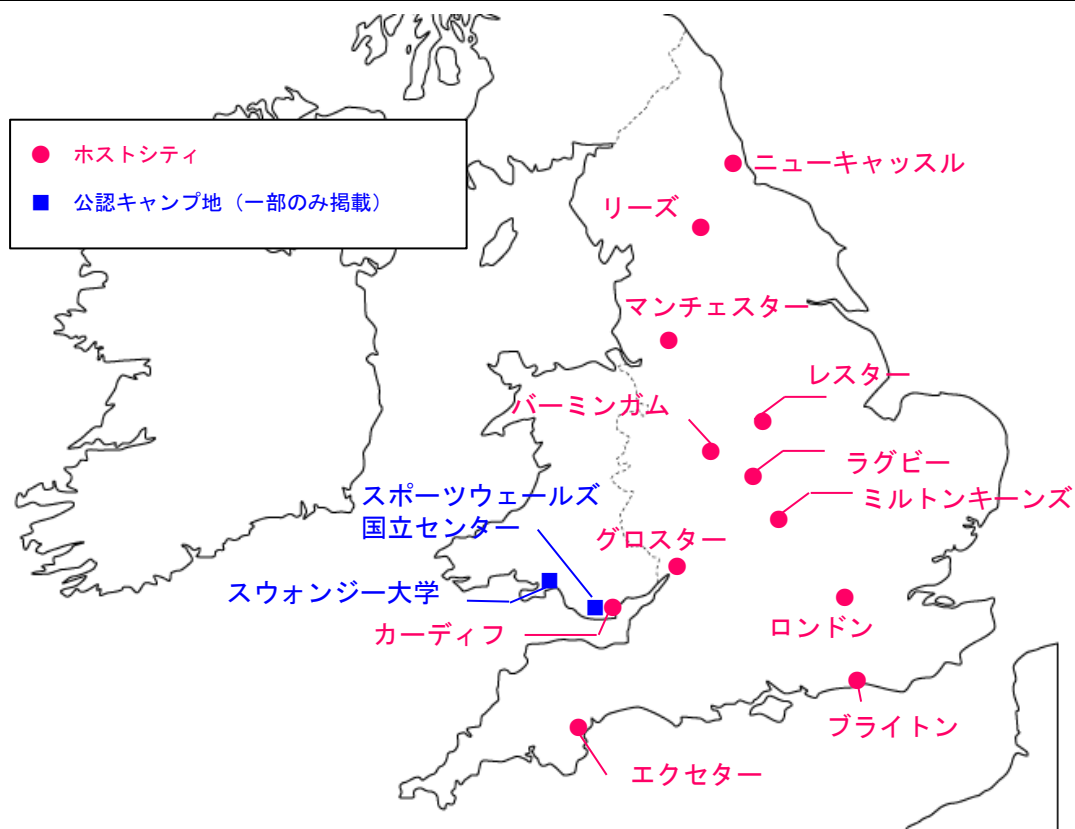
²⁴ 「Rugby World Cup 2015: RFU plans for £26m legacy investment」(BBC) <http://www.bbc.com/sport/rugby-union/20164633>

<p>フェスティバルイベントを通じたラグビーへのかわりの経験</p>	<ul style="list-style-type: none"> 大会準備段階～開催期間を通じて、大会の公式プログラム「Festival of Rugby 2015」を含め、多くのラグビー関連のフェスティバルイベントを開催する。
<p>人材への投資</p>	<ul style="list-style-type: none"> RFUはRWC2015イングランド大会の開催前から開催期間中、開催後を通じて、ラグビーのコーチ資格の取得者と審判員の育成費用として100万£以上を支出し、2017年までに有資格コーチの踏力者2万人、認定審判員7,500人を養成する予定。RFUは若年層ボランティアへの投資として、14～24歳の若者1,340人をクラブで指導的役割を担うヤング・ラグビー・アンバサダー（YRA）に任命し、地域コミュニティで試合を続けられるように図っている。YRAプログラムはクラブや大学、コミュニティに属する人であれば誰でも参加でき、年間2,000人の認定を目指している。
<p>施設の改修</p>	<ul style="list-style-type: none"> RFUの投資により、多数のクラブの施設を改修する。その他、フィールドや人工芝、照明、更衣室、交流スペースの改修に投資する。
<p>経済効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> RWC2015イングランド大会では、開催都市ごとに1カ所、ロンドン（トラファルガー広場）とラグビー市に追加会場が設けられ、英国内に合計15カ所のファン・ゾーンが設置され、英国内外からの旅行者が滞在期間を延ばし、飲食やラグビー以外のエンターテイメントへの消費を増やすきっかけとなることを期待している。 総観客動員数は230万人程度が期待され、また、海外（イングランド以外の英国を含む）から40万人以上がイングランドを訪れることが期待されている。
<p>開催後の観光客の誘客</p>	<ul style="list-style-type: none"> RWC2015イングランド大会は海外からの観光客に向けたショーケースとし、観光客に有意義な体験を提供しさせることにより、観光客の友人や家族、同僚等に旅行先として英国を薦めることを促す。

③ 各都市の取組とレガシー

RWC2015 イングランド大会の開催都市（ファン・ゾーンのみ開催したラグビー市含む）は以下のとおり。本報告書では、現地でヒアリング調査した試合開催都市 5 都市、公認キャンプ地 2 カ所のレガシーに関する取組について整理した。

開催都市		試合開催会場
ロンドン市	リッチモンド区	トゥイッケナムスタジアム
	ブレント区	ウェンブリースタジアム
	ニューハム区	オリンピック・スタジアム
カーディフ市		ミレニアム・スタジアム
ブライトン市		ブライトン・コミュニティ・スタジアム
ミルトンキーンズ市		スタジアム MK
グロスター市		キングスホルム・スタジアム
バーミンガム市		ヴィラ・パーク
レスター市		レスター・シティ・スタジアム
ニューキャッスル市		セント・ジェームズ・パーク
リーズ市		エランド・ロード
マンチェスター市		シティ・オブ・マンチェスター・スタジアム
エクセター市		サンディ・パーク
ラグビー市		※ファン・ゾーンのみ



○ロンドン市リッチモンド区【開催都市】

ロンドン市リッチモンド区のRWC2015 イングランド大会における取組とレガシーの概要は以下のとおり。

項目	内容
開催試合	<ul style="list-style-type: none"> ・ 以下の 10 試合（予選プール 5 試合、決勝トーナメント 5 試合） <ul style="list-style-type: none"> ➤ 9 月 18 日（金） 20:00～「イングランド×フィジー」（プール A） ➤ 9 月 19 日（土） 20:00～「フランス×イタリア」（プール D） ➤ 9 月 26 日（土） 20:00～「イングランド×ウェールズ」（プール A） ➤ 10 月 3 日（土） 20:00～「イングランド×オーストラリア」（プール A） ➤ 10 月 10 日（土） 16:45～「オーストラリア×ウェールズ」（プール A） ➤ 10 月 17 日（土） 16:00～「南アフリカ×ウェールズ」（準々決勝） ➤ 10 月 18 日（日） 16:00～「オーストラリア×スコットランド」（準々決勝） ➤ 10 月 24 日（土） 16:00～「南アフリカ×ニュージーランド」（準決勝） ➤ 10 月 25 日（日） 16:00～「アルゼンチン×オーストラリア」（準決勝） ➤ 10 月 31 日（土） 16:00～「ニュージーランド×オーストラリア」（決勝）
競技会場	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「トゥイッケナムスタジアム」（約 82,000 人収容） <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
ファン・ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同区が所有する「Old Dear Park」（スタジアムから徒歩約 35 分）にて、収容人数 10,000 人規模で 19 日間開催した。100 万ポンド以上の予算を投じた。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">    </div> <p style="text-align: center;">[写真：リッチモンド区提供]</p>
公認キャンプ	<ul style="list-style-type: none"> ・ ニュージーランド、南アフリカ等（レンズベリークラブ及びセントメリーズ大学）
レガシーの取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「文化振興」：大会公式プログラム「Festival of Rugby」に加え、同区独自のプログラムとして、スポーツに加え、音楽、ドラマ等の文化活動を含む「TRY IT」イベントを開催した。 ・ 「ラグビー振興」：運動不足解消や健康を目的とし、女性、若者、中断層（かつてやっていた方）に対するラグビー振興を行った。 ・ 「インフラ整備」：道路や歩道の舗装の改修や新しい公園を設置した。

＜レガシーの取組例 1：文化振興＞

大会公式プログラム「Festival of Rugby」に加え、子供から大人まで、ラグビーに限らず、同区で開催している様々なイベントに参加してもらうことを目的に、区独自のプログラムとして、スポーツ、教育、音楽、ドラマ等の文化活動を含む「TRY IT」イベントを開催した。

(1) リッチモンド区を国内外の観光客にとって特別な訪問地としてPRすること、(2) 地元住民と観光客にイベントに参加してもらい、全てのイベントのチケット販売を確実にすること、(3) イベントの参加者に楽しんでもらうこと、を目標として掲げ、音楽、ドラマ、スポーツ、芸術、公園及びファン・ゾーンの5つの異なる分類からなる160のイベントを実施した。

＜レガシーの取組例 2：ラグビー振興＞

女性や子供、若者、かつてラグビーをやっていたが現在はやめてしまった層に対し、ラグビーを楽しんでもらうこと、運動不足による肥満解消のために、ファン・ゾーンの隣接地を利用し、タグラグビーの体験イベント等を開催した。



[写真：「ENGAGE2015 HP」]

＜レガシーの取組例 3：インフラ整備＞

リッチモンド区では、ロンドン市からの補助を受け、道路及び歩道の舗装を修繕し、新しい公園を設置した²⁵。

²⁵ 「Try it Festival HP」(リッチモンド区) 及びリッチモンド区イシュベル・マーレー氏へのヒアリングより

○レスター市【開催都市】

レスター市における取組とレガシーの概要は以下のとおり。

項目	内容
開催試合	<ul style="list-style-type: none"> ・ 以下の3試合（予選プール3試合） <ul style="list-style-type: none"> ➤ 10月4日（日）16:45～「アルゼンチン×トンガ」（プールC） ➤ 10月6日（火）16:45～「カナダ×ルーマニア」（プールD） ➤ 10月11日（日）12:00～「アルゼンチン×ナミビア」（プールC）
競技会場	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「レスター・シティ・スタジアム」（32,262人収容） 
ファン・ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・ 同市が所有する「ヴィクトリア・パーク」（スタジアムから徒歩約25分）にて、収容人数5,000人以上の規模で7日間開催した。15万ポンドの予算を投じた。  <p style="text-align: center;">[写真：レスター市提供]</p>
公認キャンプ	<ul style="list-style-type: none"> ・ カナダ（レスターグラマースクール） ・ ナミビア、トンガ、ウルグアイ（レスター市に隣接するラフバラ市のラフバラ大学）
レガシーの取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「スポーツ、ラグビー振興」：特に子供や若者向けのラグビー振興のための取組を行った。 ・ 「ボランティア活動」：ER2015が運営する「The Pack」ボランティアの300人に加え、ファン・ゾーンを担当する同市独自のボランティアも39人集めた。

＜レガシーの取組例 1：スポーツ、ラグビー振興＞

2014年9月にレスター市内の中学校を代表する50人の「スクールラグビーアンバサダー」への研修を行った。アンバサダーに選ばれた生徒は、自分が通う学校や、地域の小学校において指導的な立場としてRWC2015に関する普及活動を行った。（その後、さらに40人が追加でアンバサダーに選ばれた）。また、2014年10月～2015年4月にかけて、タグラグビーの参加人口拡大のため、月に1回程度のタグラグビーのリーグ戦を小学校で開催した。小学校10校で、120人程度の児童が参加した。さらに、レスター市に割り当てられた500枚のチケットを以下のように子供等へ配布した²⁶。このような活動を通じ、子供たちがRWC2015 イングランド大会に関心を持ち、ラグビーに親しむようにした。

対象	配布枚数
小学生（タグラグビーリーグへの参加校）	180枚
小学生（レスター市が開催するRWC2015 イングランド大会関連の活動で関与度が高い学校）	120枚
学校のラグビーアンバサダー	75枚
ラグビークラブのコーディネーター（ボランティア）	60枚
大学生	25枚
地域の団体やイベント	40枚



[写真：レスター市提供]



[写真：「RUGBY WORLD CUP 2015 LEICESTER OVERVIEW」（レスター市）]

＜レガシーの取組例 2：ボランティア活動＞

ラグビーワールドカップ2015組織委員会（以下、「ER2015」）が運営する「The Pack」ボランティアの300人に加え、ファン・ゾーンを担当するレスター市独自のボランティアも39人集めた。レスター市では、RWC2015等の大規模国際スポーツイベントにおけるボランティア活動を通じて、市内のボランティア参加者へ活躍の場を提供するとともに、市内の既存のボランティアネットワークが活性化されている。



[写真：Voluntary Action LeicesterShire HP]

²⁶ 「RUGBY WORLD CUP 2015 LEICESTER OVERVIEW」（レスター市）

○バーミンガム市【開催都市】

バーミンガム市における取組とレガシーの概要は以下のとおり。

項目	内容
開催試合	<ul style="list-style-type: none"> ・ 以下の2試合（予選プール2試合） <ul style="list-style-type: none"> ➤ 9月26日（土）16:45～「南アフリカ×サモア」（プールB） ➤ 9月27日（日）12:00～「オーストラリア×ウルグアイ」（プールA）
競技会場	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ヴィラ・パーク」（42,788人収容） <div data-bbox="700 600 1214 938" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="810 972 1088 996">[写真：BIRMINGHAM POST HP]</p>
ファン・ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「イーストサイドパーク」（スタジアムから徒歩で約45分）にて、8,000人規模で8日間開催した。 <div data-bbox="501 1122 1414 1375" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="847 1404 1051 1429">[写真：ITV website]</p>
公認キャンプ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 南アフリカ（バーミンガム大学）
レガシーの取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ラグビー振興」：草の根レベルで子供たちがラグビーに親しめることを目指し、子供たちをファン・ゾーンに招待した。また、市内の学校において地元のラグビークラブの指導者等がタッチラグビーを紹介したり、一部の学校にラグビーゴールポストを設置した。

<レガシーの取組例 1：ラグビー振興>

草の根レベルで子供たちがラグビーに親しめることを目指した。まず、市内の公園 12 箇所にラグビーゴールポストを設置し、公園でラグビーを楽しめる環境を整えた。

また、学校においてラグビーの教育プログラムを設け、子供たちをファン・ゾーンに招待してラグビーに親しむ機会を創り出した。ハード面では、これまでラグビーが行われていなかったいくつかの学校にラグビーゴールポストを新設し、子供たちが学校レベルでラグビーを楽しめる環境を整備した。

さらに、小さな子供向けに、地元のラグビークラブの指導者等が市内の学校を訪問し、タッチラグビーを紹介した。また、必要な備品を学校へ提供した。



[出典：CALTHOPRE ACADEMY HP]

○カーディフ市【開催都市】

カーディフ市における取組とレガシーの概要は以下のとおり。

項目	内容
開催試合	<ul style="list-style-type: none"> ・ 以下の3試合（予選プール3試合） <ul style="list-style-type: none"> ➤ 9月19日（土）14:30～「アイルランド×カナダ」（プールD） ➤ 9月20日（日）14:30～「ウェールズ×ウルグアイ」（プールA） ➤ 9月23日（水）16:45～「オーストラリア×フィジー」（プールA） ➤ 10月1日（木）16:45～「ウェールズ×フィジー」（プールA） ➤ 10月2日（金）20:00～「ニュージーランド×ジョージア」（プールC） ➤ 10月11日（日）16:45～「フランス×アイルランド」（プールD） ➤ 10月17日（土）20:00～「ニュージーランド×フランス」（準々決勝） ➤ 10月18日（日）13:00～「アイルランド×アルゼンチン」（準々決勝）
競技会場	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ミレニアム・スタジアム」（74,500人収容） <div data-bbox="722 871 1190 1144" style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">[写真：stadiumgude.com]</p>
ファン・ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「アームズパーク」（スタジアムに隣接）にて、収容人数9,000人の規模で11日間開催した。 <div data-bbox="509 1296 1420 1583" style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">[写真：カーディフ市提供]</p>
公認キャンプ	<ul style="list-style-type: none"> ・ アイルランド、ニュージーランド等（ウェールズ国立スポーツセンター） ・ グルジア、アイルランド、ウルグアイ等（ケルティックマナーリゾート）
レガシーの取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「観光振興」：観光の取組として、チケット購入者に対して情報提供を行った。

<レガシーの取組例 1 : 「観光振興」 >

カーディフ市内の観光スポット等に関する情報を整理し、チケット購入者に対してその情報を提供した。

また、ロンドン市内のパディントン駅に広告（垂れ幕）を掲載し、誘客を図るとともに、RWC2015 イングランド大会の開催にあわせ、観光スポットとして有名なカーディフ城に、巨大なラグビーボールを装飾し、ラグビーワールドカップの開催と観光を融合する取組を行った。



[出典 : Wales Online HP]

○ニューキャッスル市【開催都市】

ニューキャッスル市における取組とレガシーの概要は以下のとおり。

項目	内容
開催試合	<ul style="list-style-type: none"> ・ 以下の3試合（予選プール3試合） <ul style="list-style-type: none"> ➤ 10月3日（土）16:45～「南アフリカ×スコットランド」（プールB） ➤ 10月9日（金）20:00～「ニュージーランド×トンガ」（プールC） ➤ 10月10日（土）14:30～「サモア×スコットランド」（プールB）
競技会場	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「セント・ジェームズ・パーク」（52,387人収容） <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>
ファン・ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「サイエンスセンター」（スタジアムから徒歩で約8分）にて、収容人数10,000人の規模で10日間開催した。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p style="text-align: center;">[写真：ニューキャッスル市提供]</p>
公認キャンプ	<ul style="list-style-type: none"> ・ トンガ（ノーサンブリア大学） ・ スコットランド（ニューカッスルロイヤルグラマースクール）
レガシーの取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「都市のPR」：都市の装飾や清掃を行って観光客の受入体制を整えた。また、ファン・ゾーンに観覧車を設置し、同市の魅力を伝えた。 ・ 「観光振興」：観光パッケージ商品を用意して観光振興を行った。

<レガシーの取組例1「都市のPR」>

都市のあらゆる場所の清掃、装飾を行い、観光客を受け入れる体制を整えた。ニューキャッスル市が設置したファン・ゾーンは、観覧車が設置され、英国内で最も人気のファン・ゾーンの一つとなり、ニューキャッスル市の魅力を伝えることができた。



[写真：ニューキャッスル市提供]

また、ニューキャッスル市では、キャンプカーの利用者のためにスタジアム横に駐車スペースを用意して提供した。約50台のキャンプカーが訪れ、遠く離れた場所に駐車させられるのではなく、スタジアムすぐ横に泊まることができることは、大いに歓迎された。

<レガシーの取組例2「観光振興」>

観光振興を促すために、観光パッケージ商品を用意した。例えば、ニューキャッスル市を訪れる多くの観光客がノーサンバーランドビーチを訪れることを希望するため、予めプログラムを用意し、観光客が試合のない日に市内において、観光アクティビティに関する要望を満たせるようにした。

○スウォンジー大学【公認キャンプ地】

項目	内容
開催キャンプ	<ul style="list-style-type: none"> ・ スウォンジー大学では、以下の3チームがキャンプを実施した。 ➤ 9月10日（土）～9月17日（土）カナダ ➤ 9月19日（月）～10月4日（火）フィジー ➤ 10月10日（月）～10月18日（火）ニュージーランド
練習場	<ul style="list-style-type: none"> ・ スウォンジー大学ラグビーグラウンド（1面） <div data-bbox="799 584 1099 813" style="text-align: center;">  </div> <p data-bbox="791 831 1110 857" style="text-align: center;">[写真：スウォンジー大学提供資料]</p>
ジム等	<ul style="list-style-type: none"> ・ トレーニングジム、屋内運動施設、体育館を提供した。 <div data-bbox="512 927 1394 1140" style="text-align: center;">  </div> <p data-bbox="791 1167 1110 1193" style="text-align: center;">[写真：スウォンジー大学提供資料]</p>
プール	<div data-bbox="780 1218 1120 1438" style="text-align: center;">  </div> <p data-bbox="791 1453 1110 1480" style="text-align: center;">[写真：スウォンジー大学提供資料]</p>
ホテル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4つ星ホテル「スウォンジーマリオットホテル」を利用した。 <div data-bbox="652 1547 1315 1771" style="text-align: center;">  </div> <p data-bbox="791 1794 1110 1821" style="text-align: center;">[写真：ニューキャッスル市提供]</p>
レガシーの取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「大学や都市のPR」 ・ 「国際交流の機会」 ・ 「スポーツイベント都市・団体」

＜レガシーの取組例 1 「大学や都市の PR」＞

ニュージーランドが滞在した際、多くのメディア関係者やキャンプの見学希望者がキャンプ地を訪れたため、メディアの取材スペースを確保したり、スウォンジー市の要望に応じてチームヘトレーニングの公開トレーニングの設定を調整することにより、注目度の高いニュージーランドチームの滞在を大学やスウォンジー市の PR の機会とした。



[写真：スウォンジー大学提供資料]

ラグビーグラウンド内には、大学の名前入りのフラッグ等が設置され、大学の PR にも貢献した。



[写真：スウォンジー大学提供資料]

＜レガシーの取組例 2 : 「国際交流の機会」＞

チームが公開トレーニングを設定した場合、スウォンジー市は市民の見学の機会を設け、地域住民がチームと交流する機会を設けた。また、その際、ウェブサイト用の写真を撮影する等、マーケティング活動もあわせて行った。



[写真：スウォンジー大学提供資料]

＜レガシーの取組例 3 : 「スポーツイベント都市・団体」＞

スウォンジー大学では、RWC2015 イングランド大会の公認キャンプの開催を通し、大学が保有するスポーツ施設のすばらしさを国内外へ示すとともに、運営ノウハウを蓄積し、その開催実績を他の国際的なスポーツイベントにおけるトレーニングキャンプの誘致に役立てている。

○スポーツウェールズ国立センター【公認キャンプ地】

項目	内容
開催キャンプ	<ul style="list-style-type: none"> ・ スポーツウェールズ国立センターでは、以下のチームがキャンプを実施した。 <ul style="list-style-type: none"> ➤ アイルランド ➤ ニュージーランド ➤ オーストラリア
練習場	<ul style="list-style-type: none"> ・ スポーツウェールズ国立センター（1面） <div style="display: flex; justify-content: space-around;">  </div> <p style="text-align: center;">[写真：スポーツウェールズ国立センター提供]</p>
ジム等	<ul style="list-style-type: none"> ・ トレーニングジム、屋内運動施設、体育館、ミーティングルームを提供した。 <div style="display: flex; justify-content: space-around;">  </div> <p style="text-align: center;">[写真：スポーツウェールズ国立センター提供]</p>
プール	<ul style="list-style-type: none"> ・ プールはホテルにある施設を利用した。 <div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">[写真：ヒルトン HP]</p>
ホテル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4つ星ホテル「ヒルトンホテル」等を利用した。 <div style="text-align: center;">  </div> <p style="text-align: center;">[写真：ヒルトン HP]</p>
レガシーの取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ラグビー振興」 ・ 「地域住民の誇りや愛着の向上」 ・ 「スポーツ都市化と観光振興」

＜レガシーの取組1「ラグビー振興」＞

スポーツウェールズ国立センターでは、公認キャンプ地として多くのラグビー設備が導入され、大会の終了後、それらの設備を地域の学校に提供し、ラグビー振興に活用した。

＜レガシーの取組例2「地域住民の誇りや愛着の向上」＞

カーディフ市では、多くの学校や人々をラグビーワールドカップへ関与させることに成功した。6週間に渡り、キャンピングカーの駐車場をカーディフ市が提供し、キャンピングカーで宿泊する人々が集まる場として開放されたため、地域住民だけではなく、アイルランド、スコットランド等から来た人々もそこに集まり、多くの人々が交流した。

＜レガシーの取組例3「スポーツ都市化と観光振興」＞

カーディフ市は、ラグビーワールドカップのような大規模イベントの運営を通し、75,000人収容の会場（ミレニアムスタジアム）のすばらしさや、カーディフ市の大規模イベントの運営能力を国内外に継続的に示すことにより、例えば2017年6月3日開催されるサッカーのヨーロッパチャンピオンズリーグの決勝戦の誘致に成功するなど、様々な大規模イベントを誘致している。

また、国際的なマラソンイベントを開催した実績もあり、それにより、カーディフ市の地域の団体がいかに機能しているかを示すことができる。そういったイベントを訪れる人々は、ウェールズ城等の観光地を訪れてくれる。

(2) RWC2011 ニュージーランド大会

① 大会概要

RWC2011 ニュージーランド大会の概要は以下のとおり。

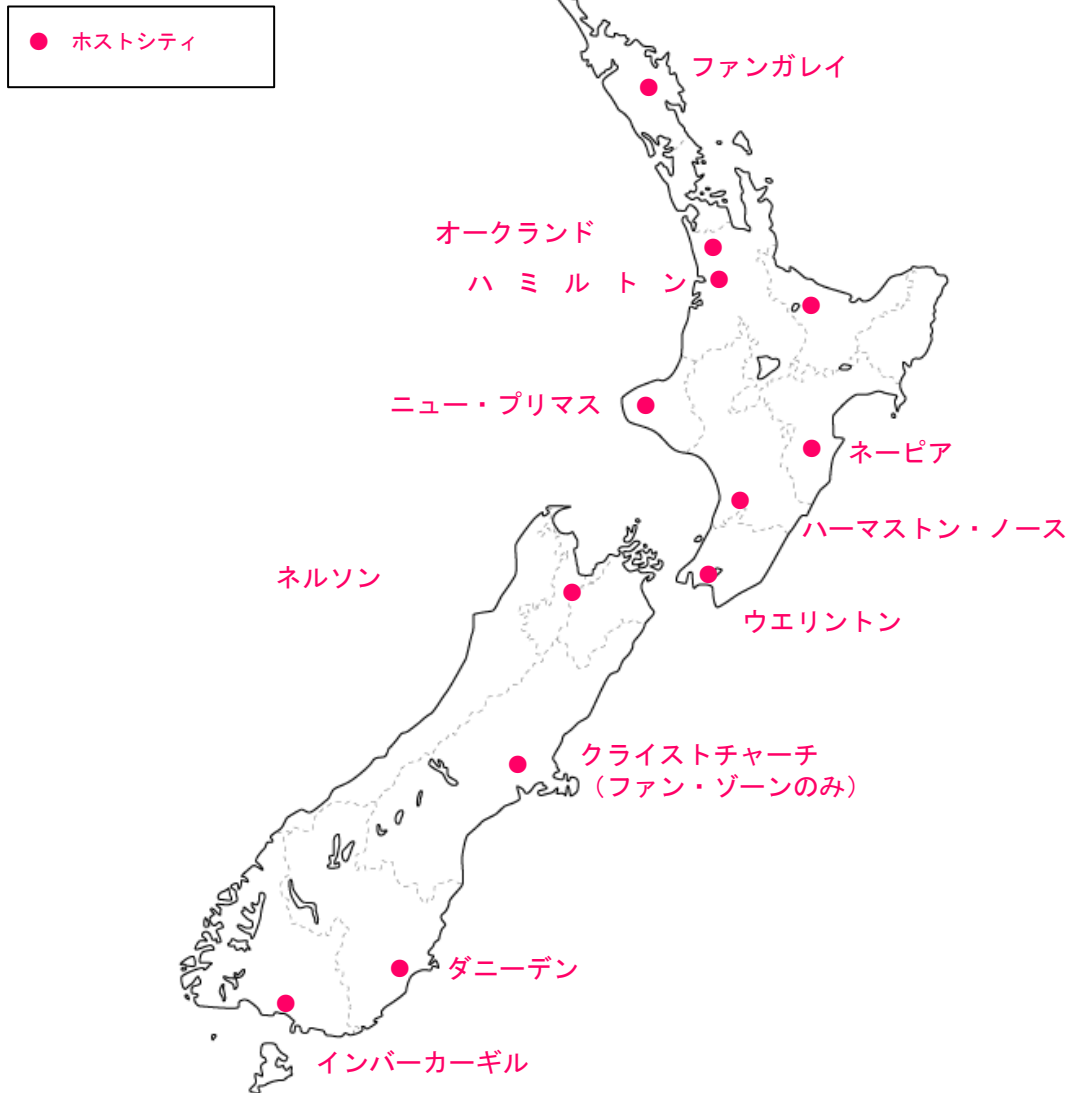
項目	内容
大会期間	2011年9月9日～10月23日（45日間）
参加チーム	20チーム ニュージーランド、フランス、トンガ、カナダ、日本、アルゼンチン、イングランド、スコットランド、ジョージア、ルーマニア、オーストラリア、アイルランド、イタリア、ロシア、アメリカ合衆国、南アフリカ共和国、ウェールズ、フィジー、サモア、ナミビア
試合数	48試合
開催都市 (Host City)	12都市（クライストチャーチはファン・ゾーンのみ）

② 大会前に狙いとしたレガシー

目標	取組
都市や地域のPR	・ 国際的なスポーツ大会の開催を通じ、国や自治体の魅力を世界へ発信する。
スポーツ施設の整備	・ スポーツ施設を整備し、将来の国際的なスポーツ大会の誘致や地域でのスポーツ振興に役立てる。
公共交通の整備	・ 大会を契機とし、公共交通を整備し、スタジアム等へ車以外の手段でも通える環境を実現する。
ボランティア	・ 大会でのボランティア活動をとおして地域のボランティア活動を推進する。
観光客	・ 開催自治体と政府が一体となり、国内外からの観光客を誘致するとともに、大会後も国外からの観光客の誘客につなげる。

③ 各都市の取組とレガシー

RWC2011 ニュージーランド大会の開催都市は以下のとおり。本報告書では、現地でヒアリングしたオークランド及びハミルトンの2都市のレガシーについて整理した。



○オークランド市

オークランド市における取組とレガシーの概要は以下のとおり。

項目	内容
開催試合	<ul style="list-style-type: none"> 予選プール9試合、準々決勝2試合、準決勝2試合、3位決定戦と決勝の合計15試合が開催された（うち、イーデン・パーク11試合、ノースハーバー・スタジアム4試合）。
競技会場	<ul style="list-style-type: none"> 「イーデン・パーク」（50,000人収容）  [写真：Eden Park HP] 「ノースハーバー・スタジアム」（25,000人収容）  [写真：「QEB Stadium」(auckland stadiums HP)]
ファン・ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> 「クイーンズワーフ」をはじめとし、市内5箇所を設置した。  [写真：「RWC booklet」(オークランド市)]
公認キャンプ	<ul style="list-style-type: none"> アイルランド、フィジー（マウント・スマート・スタジアム） スコットランド（ロイド・エルスモア・パーク） トンガ、サモア（ウェスタン・スプリングス大学） ニュージーランド、オーストラリア、イングランド（トラストスタジアム）
レガシーの取組	<ul style="list-style-type: none"> 臨海地区の開発 都市のPR ボランティア活動の推進 交通網の整備 スポーツ都市としての魅力向上

＜レガシーの取組例 1：「臨海地区の開発」＞

RWC2011 ニュージーランド大会を通じて、オークランド市はクイーンズワーフ、ウィンヤード橋、ヴィアダクトイベントセンター、カラングプラザ、ノースワーフ、ジェリコストリート、シロパークなど臨海地区の開発プロジェクトを進めた。これらは大会の開催後も地域で持続的に使用されている。

【クイーンズワーフ】



[写真：Marine Directory NZ HP]

【ウィンヤード橋】



[写真：Urban Design]

【ヴィアダクトイベントセンター】



[写真：evanz HP]

＜レガシーの取組例 2：「都市の PR」＞

オークランド市は、ニュージーランド政府観光省や経済・ビジネス・イノベーション省（当時はビジネス・雇用省）と連携し、RWC2011 ニュージーランド大会を契機としたニュージーランド及びオークランド市の PR のための取組を行った。具体的には、RWC2011 ニュージーランド大会で最大規模のファン・ゾーン「クイーンズワーフ」を設置し、そこで全 48 試合を大型スクリーンで放映するとともに、ニュージーランドの文化、ファッション、食、ワイン、音楽等を紹介し、さらに、メディアの取材や企業の商談が活発に行われるようにブースを提供する等の支援をした。

その結果、海外メディアの大半の報道においてオークランド市が好意的に取り上げられた。また、観光客からは、サービスや住民のもてなし、オークランド市の観光資源が好評価であった。

＜レガシーの取組例 3「ボランティア活動の推進」＞

オークランド市のアンケートでは、RWC2011 ニュージーランド大会の開催の結果、9 割程度の住民が、地域への誇りや愛着が強まったと回答した。ボランティアを推奨することが、都市のイメージ向上や地域への誇りや愛情の向上のため、重要であった。オークランド市では、約 2,500 人がボランティア活動に参加した。RWC2011 ニュージーランド大会の開催を通じて、大きなボランティアネットワークを構築した。

＜レガシーの取組例 4：「交通網の整備」＞

試合開催会場となったイーデン・パークとノースハーバー・スタジアム周辺の交通インフラの整備（電車、バス、フェリー）を行った。その結果として、大会後、利用者が増加し続けている。例えば、大会前まではイーデン・パークまで自家用車で移動するしかなかったが、大会後は、公共交通機関を利用してスタジアムまで行けるようになった。

＜レガシーの取組例5：「スポーツ都市としての魅力向上」＞

RWC2011 ニュージーランド大会の開催を通じてスタジアムやトレーニング施設等のスポーツ施設の整備を行うことにより、スポーツイベント開催地として魅力が向上し、将来のスポーツイベントの誘致につながる。

【マウント・スマート・スタジアム】 【ロイド・エルスモア・パーク】 【ウェスタン・スプリング大学】 【トラストスタジアム】



○ハミルトン市

ハミルトン市における取組とレガシーの概要は以下のとおり。

項目	内容
開催試合	<ul style="list-style-type: none"> ・ 以下の3試合が開催された。 <ul style="list-style-type: none"> ➤ 2011年9月6日ニュージーランド対日本 ➤ 2011年9月18日ウェールズ&サモア ➤ 2011年10月2日ウェールズ&
競技会場	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「ワイカトスタジアム」(25,800人収容) 
ファン・ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ・ フード通りとアレクサンドラ通りに、公式のファン・ゾーンを2種類設置した。
公認キャンプ	<ul style="list-style-type: none"> ・ ニュージーランド、ウェールズ (セントピータズ大学) ・ サモア、フィジー等 (セントポール大学)
レガシーの取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 都市のPR・国際交流 ・ スポーツ都市化

＜レガシーの取組例 1 : 「都市の PR ・ 国際交流」＞

公認キャンプの参加チームにおいては、管理者やコーチは選手をトレーニングに集中させたいため、基本的にはトレーニング以外の行事には選手の参加を希望しなかったが、チームに歓迎の気持ちを伝え、おもてなしをするとともに、歓迎イベント等をワイカト市の貴重な PR の機会とすべく、チームと積極的に交渉を行った。その結果、参加チームのうち、滞在期間が長かったウェールズについては、地域で開催した小規模な行事にも選手の参加が得られた。

ハミルトン市から南方へ車で 1 時間程離れたワイトモ市で行ったオープニングトレーニングセッションには 5,000 人程度の観衆が集まった。また、ワイカトスタジアムでもオープニングトレーニングセッションが開催され、100 人程度の観衆が集まった。さらに、ウェールズの選手たちは、伝統的な「ワカ」というマウンテンカヌーに乗り、ワイカト川を渡るイベントに参加し、そのイベントには海外のメディアからも注目が集まった。また、ハミルトン市の地域住民もウェールズチームに対して強い愛着を抱いた。

＜レガシーの取組例 2 : 「スポーツ都市化」＞

ワイカト市では、RWC2011 ニュージーランド大会に続き、2015 年 2 月～3 月にクリケットワールドカップ (ICC Cricket World Cup)、2015 年 5 月に FIFA ・ U20 ワールドカップの試合が開催されることとなり、RWC2011 ニュージーランド大会の開催実績が将来の大規模国際スポーツ大会の開催へとつながったと言える。

【2015 年クリケットワールドカップ】



【FIFA U-20 ワールドカップ 2015】



[写真：いずれもハミルトン市 HP]

(3) RWC2007 フランス大会

① 大会概要

RWC2007 フランス大会の概要は以下のとおり。

項目	内容
大会期間	2007年9月7日～10月20日（44日間）
参加チーム	20チーム イングランド、サモア、南アフリカ共和国、トンガ、アメリカ合衆国、オーストラリア、カナダ、フィジー、日本、ウェールズ、イタリア、ニュージーランド、ポルトガル、ルーマニア、スコットランド、アルゼンチン、フランス、ジョージア、アイルランド、ナミビア
試合数	48試合
開催都市 (Host City)	11都市 (フランス) パリ、マルセイユ、ランス、リヨン、ナント、トゥールーズ、サン・テティエンヌ、モンペリエ、ボルドー (ウェールズ) カーディフ (スコットランド) エディンバラ
公認キャンプ (Team Base) 地	パリ、リヨン、モンペリエ、ボルドー、ヴェルサイユ、モワサック、マルクシ、ヴィルフランシュ＝シュル＝ソヌ、マルセイユ、サン＝レミ＝ド＝プロヴァンス、トゥールーズ、エクス＝アン＝プロヴァンス、サン＝テティエンヌ、セヌ＝サン＝ドニ県、ポミシエ、サン＝ナゼール、アキテーヌ地域圏

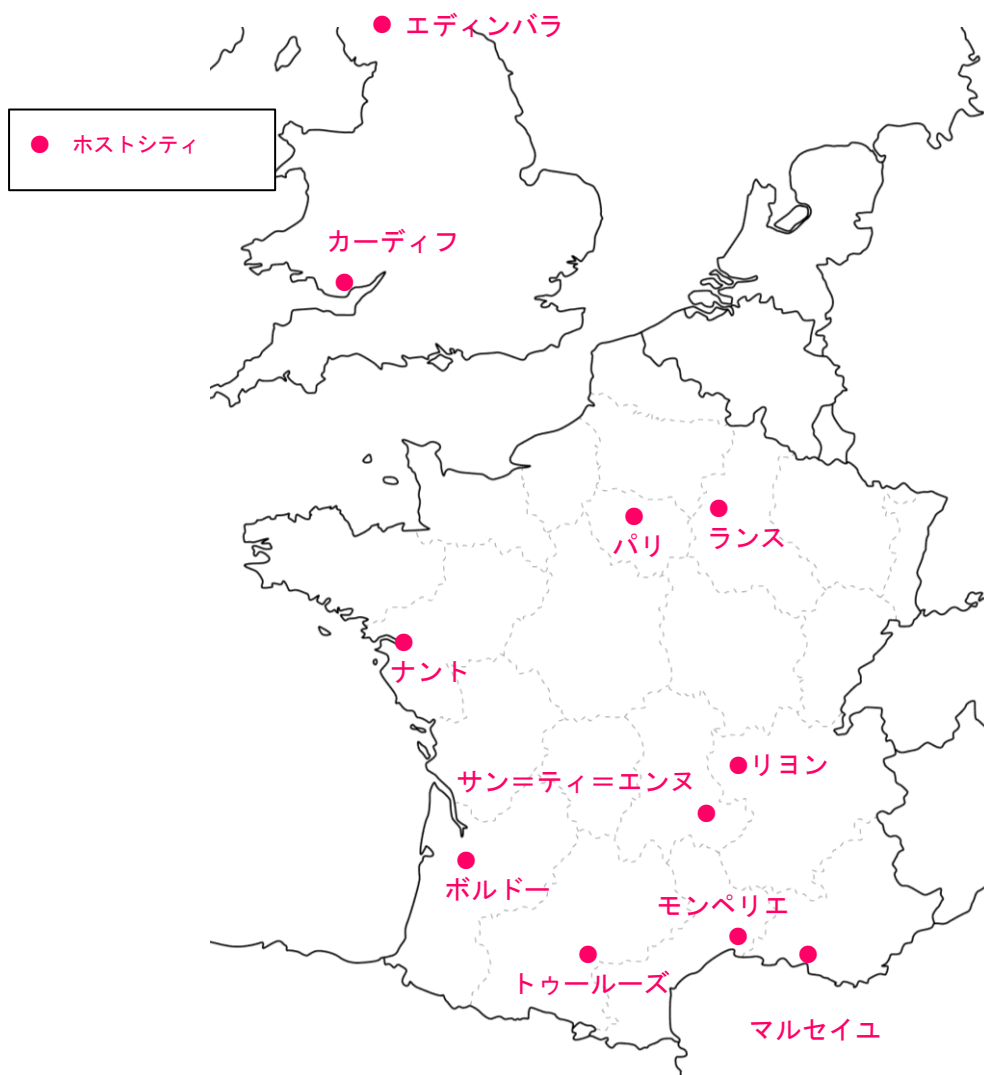
② 大会前に狙いとしたレガシー²⁷

目標	取組
観客動員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 数万人が集まって試合の再放送の映像を視聴できるエリアを設け、多くの観客動員とインパクトにつなげることにした。
外国人訪問客の誘客	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2003年にオーストラリアで行われた前回大会では、海外からの観戦者の9%が、大会開催後、再びオーストラリアを訪問することを想定していたため、RWC2007フランス大会では、それを参考とし、RWC2007フランス大会の観戦を通し、フランスの良さを伝え、口コミで好意的な感想が広がり、フランスへのリピーターを増やすことを目指した。
スポーツ施設の効率的な整備	<ul style="list-style-type: none"> ・ 既存のスポーツ施設を活用することにより、大会開催後にほとんど活用されないスポーツ施設を整備することがないようにした。
機運醸成	<ul style="list-style-type: none"> ・ RWC2007フランス大会の開催は、開催都市において地域活性化の機会となるため、フランス国内に広く開催都市を分散させ、大会開催のインパクトが開催都市だけではなく、フランス全体に広がることを目指した。
ラグビー振興	<ul style="list-style-type: none"> ・ RWC2003の開催後、オーストラリアのスーパーラグビーで観客動員が8%増加し、国内のスポーツへRWCが良い影響を及ぼす。フランス国内でのラグビーファンの増加を目指した。
経済効果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 開催国の経済状況にもよるが、間接的な経済波及効果が、直接的な消費の3倍程度になり得るため、RWC2007フランス大会において、大きな経済波及効果が得られることを目指した。

²⁷ 「Potential Economic Impact of the Rugby World Cup on a Host Nation」(Deloitte)より作成


③ 各都市の取組とレガシー

RWC2007 フランス大会の以下の試合開催会場のうち、大会の中心的な会場であるパリ市にヒアリングを行った。



○パリ

パリ市における取組とレガシーの概要は、以下のとおり。

項目	内容
開催試合	<ul style="list-style-type: none"> ・ パリ市で以下の5試合。サンドニ地区で、別途7試合を開催。 <ul style="list-style-type: none"> ➤ 南アフリカ対サモア（予選プールA） ➤ イタリア対ポルトガル（予選プールC） ➤ イングランド対トンガ（予選プールA） ➤ アイルランド対アルゼンチン（予選プールD） ➤ フランス対アルゼンチン（3位決定戦）
競技会場	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「パルク・デ・フランス」（48,527人収容） <div data-bbox="708 725 1206 1048" style="text-align: center;">  </div> <p data-bbox="639 1066 1262 1093" style="text-align: center;">[写真：「Rugby World Cup 2007 Venues」(WORLD STADIUMS HP)]</p>
公認キャンプ	<ul style="list-style-type: none"> ・ アルゼンチン、サモア、南アフリカがパリ市内で公認キャンプを実施した。
レガシーの取組	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子供や若者への教育 ・ 都市のPRとイメージの向上 ・ 住民の地域への誇り ・ 国際交流や国際化 ・ スポーツ施設の整備

＜レガシーの取組例 1 : 「子供や若者への教育」＞

フランスでは、大規模なイベントが開催される際は、政府教育省と地方自治体が協力して、学校教育においてイベントに関する教育を行うこととしており、RWC2007 フランス大会においても、学校教育の中でラグビーに関する教育が行われた。国家レベルと自治体レベルでそれぞれ教育プランが作成され、ラグビーのルールのみならず、参加国の地理等について教育が行われた。

＜レガシーの取組例 2 : 「都市の PR とイメージの向上」＞

パリ市では、ER2015 と交渉を行い、グラウンドのラグビーゴールポストやプレスカンファレンスやコメンテーターブース背後に都市名を記載することができたため、世界中の観客がパリ市の名前を目にすることとなった。

＜レガシーの取組例 3 : 「国際交流や国際化」＞

大会を契機に姉妹都市を増やし、例えばサンドニ地区では、東京とモロッコと姉妹都市になった。また、ラグビーに馴染みの深い国とは交換留学を積極的に行った。

パリ市では、ニュージーランドで、交換留学の増加やビジネス機会を誘因するためのキャンペーンを実施する等、海外でのプロモーションも行った。

＜レガシーの取組例 4 : 「スポーツ施設の整備」＞

試合を開催するスタジアムとともに、スタジアム以外のラグビーフィールドの整備を行った。

一方で、RWC2007 フランス大会開催後の 2 年間は、ラグビーへの関心や参加の高まりがみられ、需要に合った施設の供給ができなかったこと等により、一時の関心の高まりで終わってしまったとの反省もある。

5 まとめ

(1) 調査結果

各大会の調査結果について、特徴的なレガシー項目と、その取組内容や結果について整理した。

① 主な国際大会（RWC 以外）におけるレガシー

大会名	特徴的なレガシー	内容
2016 年 リオ大会	公共交通機関の整備	<ul style="list-style-type: none"> VLT（路面電車）、BRT（バス高速輸送システム）、地下鉄延線や道路の複車線化等、大会開催を通じて<u>公共交通機関が大きく整備</u>された。
	スポーツ施設の整備	<ul style="list-style-type: none"> オリンピック・パークにオリンピック・テニスセンター、カリオカアリーナ（多目的アリーナ）等が新設され、大会後も<u>トレーニング施設やスポーツ大会の拠点として活用</u>されている。 一部スポーツ施設は、大会後に解体され、学校など、スポーツ以外の用途で活用されている。
	子供や若者への教育	<ul style="list-style-type: none"> 大会を契機とした教育プログラム「トランスフォルマ」により、<u>新しいスポーツ（ラケットスポーツ等の馴染みの薄い種目）の振興や健康増進、パラリンピック種目の理解を通じた多様性の理解促進等</u>が進んだ。
2012 年 ロンドン大会	スポーツ振興を通じた健康的な生活	<ul style="list-style-type: none"> 選手への助成の増加だけでなく週 1 回以上運動する人が増加するなど、<u>選手から裾野を支える子供までのスポーツ振興</u>が進んだ。
	東ロンドン地区の再生	<ul style="list-style-type: none"> <u>象徴的なスポーツ施設（オリンピック・パーク）、交通機関や周辺設備を一体的に整備</u>し、東ロンドン地区の再生を実現した。
	コミュニティの育成	<ul style="list-style-type: none"> 約 7 万人の大会ボランティア「ゲームズメーカー」、約 8 千人の都市ボランティア「チームロンドンアンバサダー」を運営し、<u>ボランティア意欲向上を実現</u>するとともに、大会後も都市ボランティア等の<u>ボランティア活動の取組を継続</u>している。
	パラリンピックを活用した障害の理解促進や環境改善	<ul style="list-style-type: none"> 大会を契機とし、メディアでの露出機会増加による<u>障がい者に対する理解の増加、障がい者の社会参加の向上</u>や、スポーツ施設や交通機関等をはじめとした<u>施設のアクセシビリティの向上</u>を実現した。

2010年 バンクーバー大会	スポーツ施設の整備	<ul style="list-style-type: none"> 国際競技連盟（IF）の基準を満たすだけでなく、<u>国内アスリートの成長につながる施設整備</u>を行うとともに、バリアフリー等の<u>アクセシビリティにも対応</u>した。
	都市インフラの整備	<ul style="list-style-type: none"> <u>アクセシビリティへの配慮</u>を含め、選手村の後利用や交通インフラをはじめとした<u>都市インフラの整備</u>が進んだ。
	都市のイメージ向上	<ul style="list-style-type: none"> スポーツ施設や都市インフラの計画的な整備及びアクセシビリティやサステナビリティの実現に伴い、<u>世界的に有名なウィンターリゾートであるウィスラー・ブラッコムをはじめとし、都市イメージが向上</u>した。
2002年 日韓ワールドカップ	スポーツ振興	<ul style="list-style-type: none"> 大会の開催を通じ、開催自治体を中心とし、国内全土で<u>サッカーやスポーツの振興</u>が進んだ。
	スポーツ施設の整備	<ul style="list-style-type: none"> 大会の開催を通じ、国内に<u>プロサッカーや国際的なスポーツイベントが開催可能なスポーツ施設（サッカースタジアム、陸上競技場等）を整備</u>された。
	都市の知名度向上	<ul style="list-style-type: none"> <u>開催自治体やキャンプ地を設置した自治体の国際的な知名度が向上</u>した。
	国際化の推進	<ul style="list-style-type: none"> <u>学校教育等による国際教育、チーム関係者、訪日客、海外メディア等との交流</u>を通じ、国際理解の深まり、国際意識の醸成が進んだ。
1998年 長野大会	都市のPR	<ul style="list-style-type: none"> 国内で代表的なスノーリゾートである白馬村（白馬バレー）等、<u>開催都市のPRとスノーリゾートとしてのイメージ向上</u>が進んだ。また、2018年平昌大会、2022年北京大会等との協力関係も築いている。
	青少年の教育と国際化	<ul style="list-style-type: none"> 同大会で初めて行われた教育プログラム「一校一国運動」を通して、<u>青少年の国際化教育</u>を実現した。同プログラムは以降の大会でも参考とされている。
	もてなしの心の向上やボランティア	<ul style="list-style-type: none"> Team'98の活動を中心としてスポーツイベントにおける<u>ボランティアの取組</u>を行うとともに、<u>地域住民のもてなしの心が向上</u>した。

② RWC におけるレガシー

大会名	特徴的なレガシー	内容
2015 年 イングランド大会	ラグビー振興	・ <u>学校での青少年へのラグビーの普及や、ラグビー施設や設備の整備</u> を通じたラグビー振興が進んだ。
	都市の PR やスポーツ都市としての魅力向上	・ 大規模国際スポーツイベントの開催が、 <u>世界への都市の PR や、将来のスポーツイベントの継続的な誘致</u> につながっている。
	人材育成	・ ラグビーのコーチ資格取得者と認定審判員が増加した。 ・ 若年層ボランティアの育成が進んだ。
	観光振興	・ 大会の観戦を目的に国内外から訪れる観光客に対し、 <u>都市の観光資源の PR を行う等、観光を促す</u> とともに、 <u>大会後の観光客の増加</u> につなげている。
2011 年 ニュージーランド大会	都市の PR やスポーツ都市としての魅力向上	・ <u>参加国・地域を歓迎するイベントや、チームの取材に集まる海外メディア等</u> を通し、都市の知名度が向上した。また、大会の開催実績が、 <u>将来の国際的なスポーツイベントの継続的な誘致</u> につながっている。
	スポーツ施設やインフラの整備	・ 大会の開催を契機として <u>スポーツ施設や交通インフラ等が整備</u> された。
	観光促進	・ 大会を通じた都市の魅力の PR、住民のもてなしや観光資源の PR を通じた <u>観光促進</u> について、 <u>国と自治体が一体となって取り組んだ</u> 。
2007 年 フランス大会	ラグビー振興と子供や若者への教育	・ 国と自治体が協力して学校教育でラグビーに関する教育を行った。
	都市の PR やスポーツ都市としての魅力向上	・ 大会の設備に都市名を記載する等の工夫をし、大会を通じて都市の PR を行った。また、大会の開催実績が、 <u>将来の国際的なスポーツイベントの継続的な誘致</u> につながっている。
	国際交流や国際化	・ 大会を契機に <u>姉妹都市を増やす</u> とともに、 <u>海外でのプロモーションや交換留学の増加、ビジネス機会を増やすためのキャンペーン</u> 等を行った。

(2) 考察 ～RWC2019 で期待されるレガシーとは～

前述の調査結果から、RWC2019 で期待されるレガシーについて、(1) 大規模国際スポーツ大会に共通な傾向、(2) ラグビーワールドカップにおいて特徴的な傾向、(3) 近年の大会において特徴的な傾向、(4) 国内大会において特徴的な傾向、の4つの観点から、以下のように整理した。

- 大規模国際スポーツ大会において共通な傾向

国や地方公共団体の優先課題に応じて重要度の違いはあるものの、大規模国際スポーツ大会共通のレガシー

- ラグビーワールドカップにおいて特徴的な傾向

大会期間が長期に渡り、また全国の会場で開催されるため、海外参加者の滞在日数も長いこと等に着目した、ラグビーワールドカップ特有のレガシー

- 近年の大会において特徴的な傾向

近年の大規模国際スポーツイベントで取り上げられるようになったレガシー

- 日本国内の大会に特徴的な傾向

日本国内の大会で特に重視して取り上げられているレガシー

分類	レガシー	内容
大規模国際 スポーツ大会において 共通な傾向	スポーツ振興、 スポーツ施設の整備	・ ラグビーワールドカップの開催を通じ、試合開催会場や公認キャンプ地のスポーツ施設の整備や、地域の学校やラグビークラブにおけるスポーツ施設の整備が期待される。
	開催都市や公認キャンプ地の国際的知名度向上、スポーツ都市としてのブランド化	・ ラグビーワールドカップの試合や公認キャンプの開催を通じ、世界へと都市をPRすることにより国際的知名度の向上が期待される。 ・ ラグビーワールドカップの試合や公認キャンプの開催を実績とし、スポーツ施設の整備や運営ノウハウの蓄積、人材の強化等を行い、将来の更なる国際的なスポーツ大会の誘致につなげることが期待される。
	ボランティアの育成	・ ラグビーワールドカップのような大規模スポーツイベントの開催を通じ、地域住民のボランティアマインドを醸成することが期待される。
	文化振興	・ ラグビーワールドカップにおいて開催されるフェスティバルイベント等の機会を活用し、地域独自の文化を発信できる。

	交通インフラの整備	<ul style="list-style-type: none"> ラグビーワールドカップの開催を通じ、会場、トレーニング施設や宿泊施設を中心に、交通インフラの整備を行うことが期待される。
	地域経済の活性化	<ul style="list-style-type: none"> 大会の開催を通じ、雇用創出やビジネス機会の創出により、地域経済の活性化につなげることが期待される。
ラグビーワールドカップにおいて特徴的な傾向	ラグビー振興	<ul style="list-style-type: none"> ラグビーワールドカップの開催を通じ、ラグビー施設の整備等により競技としてラグビーが浸透することが期待される。
	観光振興	<ul style="list-style-type: none"> ラグビーワールドカップの観客は、試合の観戦の間に、開催自治体や周辺を周遊し、観光を行う。そのため、RWC2019の開催を観光振興につなげることが可能である。 特に、決勝トーナメントの開催自治体においては、試合が週末に集中して開催されるため、その間の観光消費を促す取組が有効であると考えられる。
近年の大会において特徴的な傾向	多様性への理解	<ul style="list-style-type: none"> 人種、年齢、障害の有無、性（ジェンダー）等の多様性を許容する社会を実現する機会となることが期待される。
	サステナビリティ（持続可能性）やアクセシビリティへの配慮	<ul style="list-style-type: none"> 環境に配慮するとともに、バリアフリー等のアクセシビリティに対応した社会の実現に寄与する機会となることが期待される。
日本国内の大会に特徴的な傾向	国際交流・国際化	<ul style="list-style-type: none"> ラグビーワールドカップでは、試合の開催や公認キャンプの開催を通じ、参加チームの国・地域との国際交流の最適な機会となりうる。
	子供や若者への教育	<ul style="list-style-type: none"> ラグビーワールドカップの開催が、参加チームの国・地域についての学習機会となり、子供や若者への教育効果が期待される。

ラグビーワールドカップ2019は、スポーツ大会の中でも、「世界からの注目・来訪者数の多い、オリンピック・パラリンピック、サッカーワールドカップに次ぐ世界第三のスポーツイベントという大会規模」であることや「開催都市が全国12カ所に点在する」という特徴を持っている。開催期間が約2週間、都市開催のオリンピック・パラリンピックに比べても、約7週間にかけて12カ所で開催されるラグビーワールドカップは、それだけ開催都市やキャンプ地の人々と交わる機会も多く、地域にとっても経済効果のみならず、子どもたちのイベント参加、ラグビー普及、ボランティア

ア育成、地域住民の活性化 など、大会をきっかけにして、社会、地域、人々の心に残る目に見えないレガシーが残ることが期待される。有形・無形のレガシーが残ったと称されるロンドンオリンピック・パラリンピックでは、ロンドンの人々が大会を作ったからこそ、地域にレガシーとして残ったと言える。選手や観客、大会を手伝う人々がもう一度このまちに来たい、と思わせる大会の準備を進めることを期待する。

ラグビーワールドカップ2019の準備及び運営に
関する施策の推進を図るための基本方針

〔平成28年2月24日〕
関係府省庁申合せ

1. はじめに

(ラグビーワールドカップの意義)

ラグビーワールドカップは、オリンピック・パラリンピック競技大会やサッカーワールドカップと並んで3大国際スポーツ大会の1つとして世界中から大きな注目を集めるものであり、ラグビーワールドカップ2015イングランド大会においては247万人の観客動員など、社会的・経済的インパクトが非常に大きいものである。

また、2019年に我が国において開催するラグビーワールドカップは、アジアで初の開催であるとともにラグビー伝統国以外で初の開催となるものであり、そのことは、アジアをはじめとしたラグビーが十分に浸透していない国・地域にラグビーを普及させる上において絶好の舞台となるものであり、そのことを通じて、これらの地域におけるスポーツの振興はもちろんのこと、ラグビーやスポーツを通じた平和と社会・経済発展に寄与することもできるものである。

折しも、現在、我が国においては、ラグビーワールドカップ2015イングランド大会における日本選手のみざましい活躍によってラグビー人気が高まる中、このムーブメントを今後ともさらに高揚させていくことができれば、国内にラグビーを普及・発展させるための絶好の機会となりうるものである。

さらに、ラグビーワールドカップ2019の開催は、その有形・無形の遺産(レガシー)を創出することを通じて、大会開催期間はもちろん大会開催後においても、スポーツの振興のみならず、地域経済の活性化を通じた地方創生への貢献、文化プログラム等を活用した日本文化の魅力の発信、震災復興の推進や教育活動の一層の推進又は観光や国際交流の促進等の社会的・経済的発展に貢献できると考えられる。また、ラグビーワールドカップは、翌年の2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の意義を更に高めるものであり、国内におけるオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの一層の促進にも寄与するとともに、国外における我が国に対する注目を集めることを可能にし、そのことがさらなる外国人等のインバウンドの増加をもたらし、社会・経済の活性化に寄与することが期待できるものである。

このようなラグビーワールドカップの開催を通じて、我が国のラグビー界が長年にわたって培ってきた、「ワン・フォー・オール、オール・フォー・ワン」や「ノーサイド」等の独特のラグビー文化を広く世界に伝える機会としたい。このことは、ラグビーというスポーツの振興のみならず、世界の発展と平和に貢献しうるものとする。

以上のように、ラグビーワールドカップの開催の効果は、国内ラグビーの更なる発展及

ラグビー文化の普及促進を果たすだけでなく、日本国内では、ビジネスとの融合による経済の活性化、震災復興及び地方創生等に貢献することが期待されるとともに、国外では、「Sport for Tomorrow」事業等を通じたラグビーの普及及び「開発と平和のためのスポーツ（Sport for Peace and Development）」等の国際的な取組への関与等によって、周辺の海外の国・地域に対してその効果を波及させていくことなどの国際貢献も行いうるなど、国内外の社会的・経済的な発展のために非常に効果的であると考えられる。

（基本方針の策定）

上記のようなラグビーワールドカップ2019の意義に鑑み、同大会の成功に向けて、大会に関連する取組を加速させるため、大会の円滑な準備及び運営に関する施策の総合的かつ集中的な推進を図るための基本的な方針として、本基本方針を定め、関連施策の立案と実行にあたっての基本的な考え方、施策の方向について明らかにする。

2. 基本的な考え方

政府は、以下の基本的な考え方に基づき、関連施策の立案と実行に取り組む。

（1）次世代に誇れる遺産（レガシー）の創出

ラグビーワールドカップ2019を開催期間において確実に成功させるのはもとより、大会の開催後においても有用であり次世代に誇れる有形・無形の遺産（レガシー）を、日本ラグビーフットボール協会等が中心となって国内及びアジアをはじめとする海外に創出する。

（2）訪日客の特性に対応した受入体制の充実

ラグビーワールドカップ2011では13万3千人の観客が海外からニュージーランドを訪問し、平均で23泊の長期にわたって滞在した。ラグビーワールドカップ2015では40万人を超える観客が海外からイングランドを訪問することを想定して大会の準備が行われた。また、ラグビーワールドカップを目的とした旅行者は、イギリス、アイルランド、フランス、イタリア、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド等、ラグビー伝統国であり、比較的、来日者の少ない国の国民が多い。ラグビーワールドカップ2019では、海外からの大量の観客を想定して、外国人の受入体制を整備することが不可欠である。

（3）政府一体となった取組と関係機関との密接な連携の推進

大会の成功のためには、国、日本ラグビーフットボール協会、ジャパンラグビートップリーグ、ラグビーワールドカップ2019組織委員会、試合が開催される都市の地方公共団体（以下「開催自治体」という）及び経済界等が一体となって取り組むことが不可欠である。大会組織委員会が、大会の運営主体として、大会の計画、運営及び実行に責任を持

ち、開催自治体が、大会組織委員会を全面的にバックアップするとともに、開催自治体として必要な準備を進め、両者が外国人受け入れ体制の整備及び開催機運の醸成等について、国等と連携して取り組む。国は、大会の円滑な準備及び運営の実現に向けて、各府省庁に分掌されている関連施策を一体として確実に実行するとともに、大会組織委員会及び開催自治体と密接な連携を図り、オールジャパンでの取組を推進するため、必要な措置を講ずる。また、新国立競技場の建設計画変更に伴う、開幕戦の東京スタジアムへの変更及び決勝戦の横浜国際総合競技場への変更並びにこれらの変更に係る種々の影響に対して、必要な措置を講ずる。さらに、上記連携と併せて、翌年の2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会と共通する施策が含まれることから、同大会に係る関係機関と連携して進めることが必要である。

(4) 明確なガバナンスの確立と施策の効率的・効果的な実行

政府は、明確なガバナンスの確立に向け、関係機関と円滑に連携して意思決定を行う。また、限られた予算と時間で最高の大会を実現するため、関連施策については、事業の進捗と効果を点検することを通じて効率的、効果的に実行し、施策に要するコストをできる限り抑制するとともに、大会の確実な成功に向けた取組を加速する。

3. 大会の円滑な準備及び運営

(ラグビーワールドカップ2019として進める準備と2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会と共通して進める準備)

ラグビーワールドカップ2019の準備及び運営においては、翌年の2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会と共通する施策について連携して準備を進めるとともに、ラグビーワールドカップ2019において特に重視すべき事項として、例えば、大会会場が東京及びその近郊のみならず全国12カ所を舞台に展開されること及び比較的長期間にわたる開催になること等があるため、これらについては、別途ラグビーワールドカップ2019において特に重視した準備及び運営を行う必要がある。

(1) 大会の円滑な準備及び運営における2020年オリンピック・パラリンピック競技大会との共通事項

(オリンピック・パラリンピックとの共通事項)

大会の円滑な準備及び運営に関しては、「2020年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会の準備及び運営に関する施策の推進を図るための基本方針」(平成27年11月27日閣議決定)において、「ラグビーワールドカップ2019は、大規模かつ国家的に重要なスポーツの競技会であること、ラグビーワールドカップ2019の準備及び運営が、翌年に開催される大会の準備及び運営と密接な関連を有するものであることから、平成三十一年ラグビーワールドカップ大会特別措置法(平成27年法律第34号)を

踏まえ、政府として必要な支援に努めるとともに、セキュリティの万全と安全安心の確保、外国人受入のための対策など、共通する施策について連携して準備を進める」こととなっている。

(共通する施策項目)

① セキュリティの万全と安全安心の確保のための対策

全ての大会関係者、観客及び国民が安心して大会を楽しむことができるよう、広く関係者の理解と協力を得ながら、以下のようなセキュリティの万全と安全安心の確保に係る各種の取組を実施する。

(* 取り組むべき事項：テロ対策、防災・減災対策等)

② 関係者・観客等の円滑な輸送のための対策

選手やスタッフ等の関係者及び観客等や貨物等の円滑な輸送が可能となるよう、以下の取組を推進する。

(* 取り組むべき事項：空港の機能強化、バリアフリー化等の空港アクセスの改善、鉄道・バス等の利便性向上、道路・交通インフラの整備等)

③ 外国人受入促進のための対策

外国人旅行者を地方へ誘客するために、海外へ日本の魅力を積極的に発信する。さらに、大会開催効果を、開催自治体、キャンプ地の自治体のみならずその他の自治体まで広く全国的に波及させるため、以下の外国人受入促進のための施策を推進する。

(* 取り組むべき事項：C I Q体制の強化その他の外国人の受入のための対策、多言語対応の強化、無料公衆無線LANの環境整備などの社会全体のICT化の推進、文化プログラム等を活用した日本文化の魅力の発信、宿泊施設の供給確保に向けた対策、外国人旅行者を地方へ誘客するための施策、水辺環境の改善、医療機関への外国人患者受入環境整備、外国人来訪者等への救急・防災対応、外国人来訪者等に係る事件・事故等への対応等)

④ 震災復興及び地方活性化のための対策

東日本大震災の被災地の復興を後押しするとともに、復興を成し遂げつつある被災地の姿を世界に向けて発信するため、被災地と連携した取組を推進する。また、大会に関連する様々な事業やイベント等に多様な主体が参画し、日本全体でビジネス機会の拡大を含め地域活性化につながるよう、大会開催の効果を全国に普及させるため、以下の取組を推進する。

(* 取り組むべき事項：東日本大震災被災地との連携、大会と連携した地域交流・地域活性化、大会に関連する様々な事業やイベント等への多様な主体の参画と連携、文化プログラム等を活用した日本文化の魅力の発信、キャンプの誘致等を通じた大会参加国との人的・経済的・文化的な相互交流等)

⑤ 環境問題への配慮

大会における持続可能性を実現するため、大会の二酸化炭素等の排出量削減や3R促進等をはじめとする環境負荷低減に向けた取組を推進する。

(* 取り組むべき事項：大会と連携した環境対策等への支援等)

⑥ バリアフリー対策

ラグビーワールドカップ2019への準備を弾みとして、スポーツ・運動を通じた健康増進、障害者・高齢者を含め全ての人々が安全で快適に移動できる公共施設等のユニバーサルデザイン化、及び障害者等への理解等のいわゆる「心のバリアフリー」による共生社会の実現を通じて障害者・高齢者の活躍の機会を増やすため、以下の取組を推進する。

(* 取り組むべき事項：ユニバーサルデザイン化された競技施設・公共施設等の整備、障害者スポーツの体験等による障害者への理解促進等)

⑦ スポーツ基本法が目指すスポーツ立国の実現のための対策

ラグビーワールドカップ2019の開催は、スポーツ基本法（平成23年法律第78号）の目指す「スポーツを通じてすべての人々が幸福で豊かな生活を営むことのできる社会」を実現する好機であり、スポーツ立国に向けた以下の取組を推進する。また、「Sport for Tomorrow」プログラムを通じて、スポーツ分野での世界の国々への貢献・協力関係の促進に係る取組を推進する。

(* 取り組むべき事項：競技力強化及び指導者の養成、アンチ・ドーピング対策の推進、地域におけるスポーツの振興、生涯を通じた多様なスポーツの機会確保のための環境の整備、スポーツ関連産業の育成及び連携、スポーツに関する科学的研究の推進、国際的な交流・貢献の推進、障害者スポーツの推進等)

⑧ 大会を弾みとした健康増進・受動喫煙防止対策の強化

大会を弾みとして、個人の主体的な健康増進の取組を促進することにより、健康寿命の延伸を目指す。このため、市町村等が実施する取組への支援を進める。

受動喫煙防止については、競技会場及び公共の場における受動喫煙防止対策を強化する。

⑨ その他の体制整備のための対策

上記①～⑧の他、大会準備及び運営のために、以下のことに関する取組を推進する。

(* 取り組むべき事項：大会協賛宝くじ・寄附金付き記念切手等の発行、式典等大会運営への関係機関の協力、税制上の特別措置、良好な無線通信環境の確保等)

(2) ラグビーワールドカップ2019において特に重視すべき事項

ラグビーワールドカップ2019の準備及び運営においては、上記(1)の2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会と共通する施策のみならず、ラグビーワール

ドカップ2019の円滑な準備及び運営に向けて、以下のような取組を特に重視して行うことが必要である。

(ラグビーワールドカップ2019において特に重視すべき事項)

① ラグビーワールドカップ2019に関する競技力の強化への支援

日本選手が最高のパフォーマンスを発揮し、過去最高の成績を収めることができるよう、戦略的な選手強化等に係る取組を進める。

(* 取り組むべき事項：トップアスリート及び次世代アスリートの育成・支援のための戦略的な選手強化、競技役員など国際的に活躍できる人材の育成、スポーツ医・科学、情報分野の多方面からの専門的かつ高度な支援体制の構築等)

② ラグビーワールドカップ2019に向けたアンチ・ドーピング活動の推進

大会のインテグリティ（公正さ、完全性）を担保するために、ドーピング違反を排除する取組を徹底する。具体的には、公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構(JADA)、世界アンチ・ドーピング機構(WADA)、及びWORLD RUGBY(WR)と連携し、インテリジェンス対応を含む強固な検査体制の構築、実践を行う。全国12会場及びキャンプ地等におけるドーピング・コントロールが円滑に実施されるよう、全ての試合会場、チームホテル等でのドーピング検査室の確保を含む施設整備、教育・研修の実施、人員体制の整備等の取組を進める。

(* 取り組むべき事項：ドーピング・コントロールに向けた施設整備の支援、アンチ・ドーピングに係る選手等の研修、ドーピング検査員の確保及び育成、ボランティアの確保及び研修、インテリジェンス体制の整備を含む検査体制の強化、国際的なアンチ・ドーピング推進体制の強化等)

③ ラグビーワールドカップ2019に向けた国内外のムーブメントの普及、ボランティア等の機運醸成

ラグビーワールドカップ2019に向けて、国内外のラグビー人口の裾野の拡大を図るため、学校教育や地域スポーツにおいてタグ・ラグビー等の取組みや「Sport for Tomorrow」関連事業等を通じたラグビーが十分に普及していない国々への指導者派遣等の取組を進める。また、各種ボランティア活動、大会に関連する取組に係る寄付等への機運醸成を図る。

(* 取り組むべき事項：大会へのムーブメントの高揚を図るため、学校体育又は地域スポーツにおけるタグ・ラグビーやストリート・ラグビー等の身近に楽しめるラグビーの普及等及びラグビーへの関心や大会メッセージの発信、「Sport for Tomorrow」プログラムの推進、スポーツ・文化・ワールド・フォーラムの開催、JICAボランティア事業との連携も活用した日本ラグビーフットボール協会「アジアンスクラムプロジェクト」の推進等)

④ 開催自治体及びキャンプ地自治体における試合（練習）会場・ファンゾーン等の整備に向けた支援

試合会場及びキャンプ地等の整備に係る経費は、原則として各開催自治体等が負担すべきものではあるが、政府としても可能な範囲内において必要な支援を行う。

（*取り組むべき事項：全国12の試合会場及びキャンプ地の練習場等に関し、国際水準に合致した試合（練習）会場及びファンゾーン等の関連施設の整備及びそれに対する多様な支援等）

⑤ ラグビーワールドカップ2019組織委員会及び日本ラグビーフットボール協会の体制強化に向けた支援

ラグビーワールドカップ2019の準備及び運営が円滑に実施されるよう、大会組織委員会及び日本ラグビーフットボール協会の体制強化への支援を進める。

⑥ ラグビーワールドカップ2019に関する関係府省庁連絡会議の実施

ラグビーワールドカップ2019の準備及び運営が円滑に実施されるよう、関係府省庁間の連携を深めるため、関係府省庁連絡会議を開催し、連携・支援方策を協議する。

（了）

28ス国際第13号
総行地第179号
平成28年12月9日

各都道府県担当部局長 殿
(スポーツ担当課・財政担当課・市町村担当課扱い)

スポーツ庁国際課長



(印影印刷)

総務省地域力創造グループ地域振興室長



(印影印刷)

ラグビーワールドカップ2019における
地域交流推進要綱の策定等について（通知）

ラグビーワールドカップは、オリンピック・パラリンピック競技大会やサッカーワールドカップと並んで3大国際スポーツ大会の1つとして世界中から大きな注目を集めるものであり、大会と連携した地域交流・地域活性化施策などにより、大会開催の効果を全国に普及させることが期待されております。

このたび、別添1のとおり「ラグビーワールドカップ2019における地域交流推進要綱」を策定しました。あわせて、平成29年度以降のラグビーワールドカップ2019に係る地方財政措置の考え方について別添2のとおり取りまとめました。

各地方公共団体におかれましては、これらを参考にしていただき、ラグビーワールドカップ2019の準備及び運営について格別の配慮をお願いいたします。

また、各都道府県におかれましては、貴都道府県内の市町村に対し、本通知の趣旨について周知されるようお願いいたします。

なお、この通知は、地方自治法（昭和22年法律第67号）第245条の4第1項の規定に基づく技術的助言であることを申し添えます。

ラグビーワールドカップ 2019 における地域交流推進要綱

第 1 趣旨

ラグビーワールドカップ 2019 (以下「大会」という。)の開催により多くの選手や観客が来訪することを契機に、全国の地方公共団体(二以上の地方公共団体による連携主体を含む。以下同じ。)と大会参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を推進することにより、スポーツの振興、教育文化の向上及び共生社会の実現を図るとともに、震災復興及び地方創生等に貢献することが期待されている。

本要綱は、このような地域交流を積極的に推進することを目的に策定するものである。

第 2 地域交流

地域交流とは、大会の開催都市としてラグビーワールドカップリミテッド(以下、「RWCL」という。)に承認された地方公共団体(以下、「開催自治体」という。)又は大会の公認チームキャンプ候補地として RWCL に承認された地方公共団体(以下、「公認キャンプ候補地自治体」という。)が行う、住民等と次に掲げる者との交流及び当該交流に伴い行われる取組であって、スポーツの振興、教育文化の向上及び共生社会の実現を図ろうとする取組をいう。

- ア 大会等に参加するために来日する選手等
- イ 大会参加国・地域の関係者
- ウ 日本代表チームの選手等

第 3 交流計画

- (1) 第 2 の地域交流の取組を実施するにあたって、スポーツ庁及び総務省の支援を希望する開催自治体又は公認キャンプ候補地自治体は、公益財団法人ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会(以下「大会組織委員会」という。)を通じ、スポーツ庁に対し、交流計画を提出することができる。
- (2) 交流計画には次に掲げる事項を記載する。
 - ア 交流の相手国に関する内容
 - イ 行おうとする交流及び当該交流に伴い行われる取組の内容
 - ウ その他交流の実施に必要と認められる事項
- (3) スポーツ庁は、交流計画に記載された事項を確認・審査し、当該計画が確実かつ

大会後も継続的に実施される見込みがある場合は、地域交流の取組の実施に対してスポーツ庁及び総務省の支援の対象とする。なお、確認・審査に当たっては、スポーツ庁はあらかじめ大会組織委員会の意見を聴くものとする。

(4) スポーツ庁は、(3)に基づき支援の対象とした場合は、その概要等について総務省に通知するとともに、インターネットその他の方法により公表する。

(5) 前4項の規定は、交流計画を変更する場合に準用する。

第4 スポーツ庁及び総務省の取組

(1) スポーツ庁

スポーツ庁は、大会組織委員会と協力し、大会における地域交流の取組の推進を行うことに意向を持つ団体及び第3に基づき支援の対象とされた開催自治体並びに公認キャンプ候補地自治体の地域交流に関する相談に応じる窓口を設置する。

(2) 総務省

総務省は、第3に基づき支援の対象とされた開催自治体及び公認キャンプ候補地自治体に対して地方財政措置を講じる。

(別添2)

ラグビーワールドカップ 2019に係る地方財政措置の考え方について

1. 大会の開催都市としてラグビーワールドカップリミテッド（以下、「RWCL」という。）に承認された地方公共団体（以下、「開催自治体」という。）及び大会の公認チームキャンプ候補地としてRWCLに承認された地方公共団体（以下、「公認キャンプ候補地自治体」という。）の地域交流等の取組に対する特別交付税措置

(1) 対象団体

開催自治体又は公認キャンプ候補地自治体

（地域交流については、ラグビーワールドカップ 2019における地域交流推進要綱（以下「要綱」という。）第3に基づき、スポーツ庁が支援の対象と認めている地方公共団体であること。）

(2) 対象経費

（地域交流）

要綱第3に基づく交流計画に記載した取組に要する以下のような経費を対象とする（一般職員の旅費など行政の内部管理経費は対象外）。

- ・ 歓迎イベントの実施に要する経費
- ・ 選手団による現地体験に要する経費
- ・ 競技イベントの開催に要する経費
- ・ ボランティアの研修に要する経費 等

（公認キャンプ実施）

公認キャンプ実施のための基準を満たすトレーニング施設の確保や必要な環境整備に要する以下のような経費を対象とする。

- ・ トレーニング機器のレンタルに要する経費
- ・ トレーニング施設としての民間施設利用に要する経費
- ・ セキュリティ確保に要する経費（フェンス設置費など） 等

(3) 措置額

対象経費の一般財源合計額の2分の1

2. 開催自治体又は公認キャンプ候補地自治体が行う施設改修に係る地方債措置

(1) 対象団体

開催自治体又は公認キャンプ候補地自治体

(いずれも公共施設等総合管理計画を策定している地方公共団体であること。)

(2) 対象事業

① 開催自治体においては、既存のスポーツ施設を「会場建設等に関する運営計画」が求める必須条件に適合させるために必要不可欠な改修事業。

② 公認キャンプ候補地自治体においては、既存のスポーツ施設を公認チームキャンプ地ガイドラインの基準（必須条件に限る。）に適合させるために必要不可欠な改修事業。

※ 「会場建設等に関する運営計画」とは、公益財団法人ラグビーワールドカップ2019 組織委員会が開催自治体と協議の上策定し、RWCLにより承認された運営計画のことをいう。

※ 施設の新設は対象外。

※ その他、仮設施設や収益性のある施設の整備事業は対象外となるなど、地域活性化事業債の取扱いに準じる。

(3) 地方債措置

地域活性化事業債（充当率 90%、交付税措置率 30%）

付録（文献一覧）

< 1 (2) RWC2019 日本大会の概要 >

- ・ 公益財団法人ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会 提供資料
- ・ 公益財団法人ラグビーワールドカップ 2019 組織委員会 HP
<http://www.rugbyworldcup.com/news/215578?lang=ja>

< 2 レガシーとは >

- ・ 「OLYMPIC LEGACY」(IOC)
https://stillmed.olympic.org/Documents/Olympism_in_action/Legacy/2013_Booklet_Legacy.pdf
- ・ 「2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会におけるレガシープラン」東京2020大会組織委員会 HP

< 3 (1) 2016年リオ大会 >

- ・ 「2016年リオ大会立候補ファイル」(リオ市)
https://doc.rero.ch/record/20998/files/2016_OG_-_Rio_-_Candidature_File_-_Volume_1.pdf
- ・ 「2016年リオデジャネイロ大会のレガシープラン」(笹川スポーツ財団)
<http://www.ssf.or.jp/research/international/spioc/br/brazil/tabid/1025/Default.aspx>
<http://www.ssf.or.jp/research/international/spioc/br/brazil/tabid/1024/Default.aspx>
<http://www.ssf.or.jp/research/international/spioc/br/brazil/tabid/1023/Default.aspx>
<http://www.ssf.or.jp/research/international/spioc/br/brazil/tabid/1051/Default.aspx>

< 3 (2) 2012年ロンドン大会 >

- ・ 「2012年ロンドンオリンピック・レガシーの概要」((一財)自治体国際化協会 ロンドン事務所)
- ・ 「London 2012: a legacy for disabled people」(London 2012)
- ・ 「Inspired by 2012: The legacy from the London 2012 Olympic and Paralympic Games」(MAYOR OF LONDON HM Government)
https://www.gov.uk/government/uploads/system/uploads/attachment_data/file/224148/2901179_olympicLegacy_acc.pdf

< 3 (3) 2010年バンクーバー大会 >

- ・ 「VANCOUVER 2010 Bid Report」(vancouver 2010)
<https://stillmed.olympic.org/Documents/Reports/Official%20Past%20Games%20Reports/Winter/2010/ENG/Bid-Report.pdf>
- ・ 「オリンピック・レガシーについて」(株式会社三菱総合研究所)

- ・ 「イベントのサステナビリティとレガシーの考察」(セレスポ サステナブルイベント研究所)
- ・ 「Sustainable Sport and Event Toolkit(SSET)」(Vancouver 2010)
http://www.gstcouncil.org/images/library/11-Sustainable_Sport_and_Event_Toolkit-_Initiative_by_Vancouver_2010_Olympic_Committee.pdf
- ・ 「オリンピックがもたらす開催都市への波及効果～バンクーバー冬季オリンピック編～」(カナダ観光局メディアセンター)

< 3 (4) 2002 年日韓 W 杯 >

- ・ 「特集 1 : 2002FIFA ワールドカップにおける国際協力」((一財)自治体国際化協会)
http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/articles/sp_jimu/157_1/INDEX.HTM
- ・ 「2002 FIFA ワールドカップ大会報告書」(2002 年ワールドカップサッカー大会日本組織委員会)
- ・ 「W 杯の事後検証～自治体による検証はなされたのか～」(RIETI)
- ・ 「カメルーンがやってきた中津江村長奮戦記」
- ・ 「ワールドカップ・キャンプ誘致とまちづくりー大分県中津江村の取り組みー」

< 3 (5) 1998 年長野大会 >

- ・ 「第 18 回オリンピック冬季競技大会公式報告書」(信濃毎日新聞社)
- ・ 「一校一国運動」の今日的展開
http://blog.kanto-gakuen.ac.jp/olympic/files/5_Takaki.pdf
- ・ 「チャレンジ Tokyo 長野五輪が子どもたちに残したもの」(NHK ONLINE)
<http://www.nhk.or.jp/shutoken/miraima/articles/00539.html>
- ・ 「2016 年 12 月 14 日 聯合ニュース」
http://www.chosunonline.com/site/data/html_dir/2016/12/14/2016121402795.html

< 4 (1) RWC2015 イングランド大会 >

- ・ 「Try it Festival HP」(リッチモンド区)
https://www.richmond.gov.uk/try_it_festival
- ・ 「RUGBY WORLD CUP 2015 LEICESTER OVERVIEW」(レスター市)
- ・ Voluntary Action LeicesterShire HP
- ・ CALTHOPRE ACADEMY HP

< 4 (2) RWC2011 ニュージーランド大会 >

- ・ 「The Stadium of Four Million」(NEW ZEALAND 2011)
<https://www2.deloitte.com/content/dam/Deloitte/uk/Documents/sports-business-group/deloitte-uk-sbg-potential-economic-impact-rwc.pdf>

< 4 (3) RWC2007 フランス大会 >

- ・ 「Potential Economic Impact of the Rugby World Cup on a Host Nation」 (Deloitte)
<https://www2.deloitte.com/content/dam/Deloitte/uk/Documents/sports-business-group/deloitte-uk-sbg-potential-economic-impact-rwc.pdf>]

**ラグビーワールドカップ 2019 を通じた地域活性化についての調査研究
報告書**

平成 29 年 3 月

総務省 地域力創造グループ 地域振興室

〒100-9926 東京都千代田区霞が関二丁目 1 番 2 号

TEL: [代表]03-5253-5111 (内 23124) [直通]: 03-5253-5533 FAX: 03-5253-5537

[調査・研究] 株式会社日本能率協会総合研究所

〒105-0011 東京都港区芝公園 3-1-22 日本能率協会ビル TEL: 03-3434-6282 FAX: 03-3578-7547